

枚擧に違なく、困つてゐる者には食を與へた上、道を拓き與へ、病人者には手術費、藥價を與へる等の事が數へきれぬ程多い。中でも特筆すべき報恩美談は二十數年前氏がまだ天稔棒を擔いで魚賣りの頃ひいきしてくれた婦人：今は老婆だが：當時は相當の暮らしであつたが最近没落、家財道具まで債權者に渡るといふ事を聞いた池川氏は債權者に自ら接して再三再四交渉したが應ぜぬので氏は多大の費用を投じ老婦人に對する正義報恩のため法廷で戦ふ事幾度か、つひに目的を立成したければ共老婦人には心配をかけまいと終始秘してゐると云ふ。此處に氏の人格の偉大さがあり誠に特筆のあたひがありといふべきである。

次に忘れてはならぬことは池川氏夫人即ち女將さんの内助の功である。夫人もやはり御學瀬生れ今津時次氏の三女で淺井家に奉公した。弟が多いので犠牲的に働きに出たわけ、廿七歳の時に池川氏に嫁いたが人に接するにだけのお上手ではなく心から親切である。雇女を使ふことの妙は一寸比類なく、今日の大料亭になつても自分は年中粗末な座蒲團に粗衣をつけた身をゆだね、頭髮などは特別の場合の外は結髪の厄介にならないといふ質素ぶり、一途にお家大事と働きそれで上品な天稔の顔立ちが崩さない。まことに名女將であり賢夫人である。魚屋今日の成功の一半は女將だとは長濱町の誰もがいふ所である。

## 坂本節氏

園藝の里、長岡郡三里村吹井に坂本氏の名は、梨の花の白きよりもすつと薫り高い存在である。縣立高知一中の半ば頃、父君の病弱は、一切の家事處理に氏を必要として中途退學後は東ら家にあつて富裕なる農家の主としての采配を振つたものであるが、現在高知市中央卸賣市場にある土佐園藝會社の創立直後監査役となり、更に取締役に推擧される。村會議員に當選すること二回、村では屈指の人物として郷黨の信望あついはたゞにその休軀の堂々たる、素封家たるの故爲のみでない道樂は鐵砲と謠曲、古い近衛聯隊の衛生兵として、勤務勉勵のかごにより煙草入を下賜された光榮を有つ、夫人は介良村の富豪鍋島運猪氏の息女、長男博行君(三)は城東中學卒業後師範の二部に在學中、二男隆行君(七)は城東中學在學中、長男富子(八)さんは縣立第二高女にある。年齒未だ四十六歳の働き盛り。

## 中島肇樹氏

高知市追手筋の小兒科病院長で醫學博士である氏の令名は餘りにも高い。かつて高岡郡新居村小

學校の校長として濃厚圓滿の老教育家たる名聲を縣教育界に馳せた嚴父が、まだ肇樹氏が幼少脆白の頃人に語つて、「此の子はごうにか物になりませうわい」と言つた通り、子を見ること親に如かず實に出藍の寧才兒であつた。やがて縣立海南中學から憧れの一高へ、帝大醫學部へと倍々その英才を發揮した氏は夙に昭和七年の春醫學博士の榮譽に輝やいて現在の所に開業。氏は趣味即ち仕事の人で天職に對する飽く迄熱心の努力家であるが、一面信仰の心あつく新興「成長の家」の敬虔なる同人として知られてゐる。

## 山岡廣馬氏

長岡郡後免町の香長病院に専務理事として、重厚な人格者である氏は、同郡三和村里改田の産、縣立高知農林學校を明治三十八年に卒へて、介良村他五ヶ村立實業補習學校の教員に聘せられ、次いで三和村役場農會技手を経て村會議員に當選、昭和七年には國見保護施設森林組合長に推され、土佐山林會の評議員寺、町村自治界に於ける先覺者である。香長病院へは昭和八年に入り院の内外に信望が多い。趣味は釣と喜多流の謡曲をよくし、花にも堪能である。氏の生花趣味はたゞに氏のみでなく、祖父林平氏は東京の家元で皆傳を受け父君も亦斯道に有名であつた。日本生命三和代理店の金

看板が光る自宅には、令弟八郎氏の息女、即ち姪に當る多惠子さんを迎へて現に縣立高女に通學中その美しい君が奏でる床しい琴の音も洩れて一家の團欒いと濃やかである。

## 今村貞太郎氏

人材雲の如き野村王國にあつて鬼燈の如く輝く一人、今村貞太郎氏は徹頭徹尾努力奮闘の人、どこ迄も堅實に一歩／＼地盤を固めて行く精魂の主である事は、何よりも氏の経歴が雄辯に証明してゐる。即ち元の丸一製紙會社に在るや勤續實に二十五年、一見習社員から營業部の主任に累進する迄には到底普通人のよく爲し得ざる努力と誠實、そして忍耐が必要であることは言ふ迄もなからう。丸一が日本紙業と合併するや抜かれて朝鮮京城支店長の重任にある事四ヶ年、招かれて野村組保險部に入社したのは昭和四年であつた。茲でも氏の奮闘ぶりは認められて同七年には早くも主任に昇進し今日に及んでゐるが、現在同社保險部が、帝國生命、大同生命、日本徴兵、神戸海上火災、大阪、日本各海上火災の各保險會社に連絡して業績の隆々たるは、今村氏の功績に負ふところ最も大なりと言ふべしであらう。あけても暮れても事業を趣味に又友にして生くる全くの事務家肌、長男久壽輝君(七)は横濱高商卒業後、東京海上火災に勤務中、外に二男二女の子福者である。

## 宮崎開作氏

縣下自動車交通業者界に「小野村」の綽名で呼ばれる氏は現時香美郡山田町驛前宮崎貨物自動車の經營者である。氏が業界に志したのは未だ自動車が今日の如く發達してゐなかつた二昔前の大正六年斯業の將來大いに有望なるに着目し、郡部に於ける自動車運輸の先驅者として香郡北部に輕快なる車を走らしたのた始まる、次いで新設の美良布自動車を合併して茲に香陽自動車株式會社を創立、その第一線に立つて大いに奮闘、その才腕を買はれて後野村自動車と合併する等、氏の盛名は大いに舉がり現に縣貨物自動車組合理事長の要職に推されてゐる。

氏は幼時赤貧の家に人と爲り、十五歳にして高知市の野口自轉車店に入店、主人の信賴を得て本町下一丁目に支店開設と共に其店務一切を任されたが徴兵に合格して台灣守備隊に編入され、除隊後香美郡山田町に自轉車商を獨立、刻苦精勵して徐ろに堅實なる地盤を築いたもの、温厚寡言にして而も事に臨んで果斷、その商機を見ると、膽つ玉の太きいのは宣なり小野村の異名も適評である夫人は香宗村中村氏の令妹にして内助の功多し、長男は城東商業に在學中、長女は吾川郡長濱町の登記所に勤務する北村氏に嫁す。

## 中島造氏

慶應三年十月吾川郡秋山村甲殿に生れ、當時の高知一中を卒業、松山聯隊に入營、除隊後東京の水産講習所に修學三年のち歸郷して安藝郡室戸町に鯨肉罐詰工場を創業、大いに潮吹く鯨の意氣を發揚せんとする折柄日清の役に召集されて出征、凱旋後勳八等瑞寶章を賜はる。次いで吾川郡森山村の助役に推されて一期を勤め終るや再び水産界に返り咲いて宇佐港を本據に遠洋漁業に氣を吐く折、又もや日露戦争に應召従軍、各地に轉戦して赫々たる武勳を樹て歩兵曹長に昇進、武運日出度く凱旋して勳七等青色桐葉章を授けられた武勳の士。吾川郡會議員に當選した事あり、多年研究の水産事業を一轉園藝方面に轉向、爾來産業組合其他に關係すること久し。昭和十年親戚の前縣議横川久衛氏に勧められて現在の長濱町に移住、同町横田野報徳組合を創設組合長となつたが、右は縣下にも有名な烟草の耕作と、野菜の速成栽培を指導する組合である。

氏は人と爲り高潔の人格者で、舊姓は島田古く中島家を繼いだもの、現時吾南に於ける速成栽培の權威者として聞へ、老來倍々研究に没頭、その熱心なるは等しく郷黨の敬服するところである。長男景吉君は東京農業大學を卒へて現在は森山信用組合長として活動、二男豊海氏は高知市萬々の

島本家に入り、現在高知市會議員として知られてゐる。

## 土ヶ内美代氏

鏡川の清流脚下を浸す潮江橋畔の高等旅館臨水館の女將として、細腕よく内外を切廻し、女丈夫の聞へ高い氏は當年四十三歳、未だ残んの姥櫻中々に匂ふ頃である。香美郡山田町に生れて幼時父母を失ひ、東京に居住する長姉を頼つて上京、つぶさに人の世の辛酸を嘗めたが縁あつて在京の長野縣人某氏に嫁し中流の生活を營んでやれ、のひと息つく間も無く、大正十二年の大震災は美代さんからその最愛の夫君を奪つて仕舞つた。再び木から落ちた猿の境涯に泣く、郷里へ歸つた氏が、女の生活の料に求めた仲居奉公中、その物堅さと眞面目に屬魂惚れこんだのは市内新京橋の吉岡氏の母堂で、この人を移楯に間もなく美代さんが獨立して乗り出したのが舊山崎旅館の經營であつた。間もなく現在の地を買収、新築して、名も床しい臨水館の看板を掲げるに到り、名實共に一流旅館として大方の歓迎を受け、鐵道省、第十一師團、縣農會の指定旅館となり、こゝに女將の名は燦として輝くに到つたが、氏は常に吉岡氏母堂の厚恩を忘れず、眞の親として仕へるその衷情は知る人のことごとく何れも感服せぬはない。

## 窪田淺馬氏

戰國時代、長家の居城の地たる長岡郡岡豊の城跡は、星霜幾百年を経て徒らに苔むす礎石を残すのみ、さらには遡れば上古土佐の國守紀貫之の遺跡の數々など、今はたゞそこはかの物語りを泛べて流れる國分の清流に昔を偲ぶよすがもないが、傳ふるところ悉く往昔土佐文化發祥の地とも云ふべき此處岡豊の村長は窪田淺馬氏(六)と呼び、八面玲瓏の圓滿人、同郡上倉村八京の出身で元來は教育家の出即ち高知師範を卒へて、長岡尋常に教鞭をとつたを初に、上倉第一小學校、同じく第二小學校、岡豊小學校から田井尋常に轉ずる二十數年、先年退職して悠々自適の日を送る中、岡豊村に懇望されて昨十二年三月村長に就任、以來未だ日淺しと雖も村治に熱心なる、公平無私なるは等しく村民の認むるところ近來の名村長の名が高い、家庭は一男三女、世嗣は幹部候補生として隣縣善通寺の聯隊に入營、二人の令嬢は他家に嫁して家にあるは次女の君さんのみと云ふ。

## 堀見虎衛氏

高知市播磨屋町の莫大小、帽子、洋物商店主、市内鷹匠町に生れて第三小學校を卒業後、堺町の

松本呉服店に店員奉公を出世双六の振出しに、月八圓の給料を七圓五十錢迄貯めたと云ふから一通りの人物ではない、漸く尠少の資本金で、江ノ口町に縫糸、毛糸商を開業したのが獨立の初め、中の橋通りに移つて雜貨をも商つた當時の苦心奮闘は顧みて血のにじむ程であつたと云ふ。其後神明通りに移轉、今の商賣に轉じ、日々發展を見てゐる中、是非にと懸望された友人の債務保証に約五千圓の痛手を蒙つたが、不撓不屈の氏は何のこれしきと倍々奮奮努力した結果、商運日に榮へて大正十一年には現在の處に移轉擴張して遂に今日の隆盛を見るに到つたものである。氏の信條として飽く迄も自力本願に他人に頼らぬ主義は、立派な親戚を持ち乍ら如何に困難の場合でも是に絶り泣きつく様な事はしなかつたもので、此の点大いに後輩に訓へるものがある。氏は非常な旅行好きで高知ハイキング俱樂部を牛耳つてゐるが、内地一般はもとより遠く滿洲、朝鮮迄も旅した經驗を有つてゐる。夫人は長岡郡大杉村眞島氏の長女、長男善造氏は父君の業を輔け、二男は城商卒業後大阪の千原商店に勤務、三男も亦城商を卒へて自宅で父業に精勵する。店の礎は磐石よりも堅い。

## 大和榮氏

本姓は福原、高知映畫界の牧野省三と謳はれる手腕の主。映畫が未だ今日の隆昌を見ない以前から

夙にこれを民衆娛樂の第一藝術なりと着眼して生涯を映畫興行界に送るべく決心し、未だ年少十八歳の折、堀詰の鳳館に入つたを最初に三十六歳の今日迄、十年一日の如く映畫に活き、映畫に送つて來た人、今高知の斯界に大和の名は千鈞よりも重きを爲してゐる、今城見町の常設館迎陽館を收めて大和館と改稱經營以來、それ迄逆境に在つた同館をして今日の繁榮を示すに到る起死回生の手腕は、蓋し大和なる哉の世評を裏書するに足らう、一方同民主宰の地方巡業班は縣下各地を一日の暇なく興行して、單調な豊山漁村にこよなき慰安の花を咲かせて居る、春秋未だし才人、やがては大マキノ省三の稱を更に大きく力強く縣下映畫界に印せしむるであらう。

## 上村豊實氏

世はまさに軍需工業の黄金時代、機械の轟音さへ好景氣の春を謳ふに似たりこゝ高知市棧橋通りに堂々たる谷村鐵工所の總支配人として光る氏も亦奮闘努力、以て今日の地位を爲した人である。父福一氏は古來煙草の産地として知られる嶺北東豊永村より出で、民營の頃市内山田町に煙草の製造業を営んだが其官製とともに廢業したものを、豊實氏は縣立海南中學に學び、中途大阪市の小野造船所に勤め、歸郷後は、西原、小原の各鐵工所に實地の研究を重ねた後、今の谷村鐵工所の紺屋町

の頃一旋盤工として入所、間もなく工場主任に拔擢せられ、大正十二年谷村が現在の所に移轉すると共に總支配人に擧げられて現在一千坪の同工場、又棧橋の同分工場のすべてを意の儘に動かす最高の地位を占めた、宛然機械の中から生れた様な活動家。昭和九年には陸海軍兵器廠の用達工場に撰定され、さてこそ今次軍需工業の好景氣の波に乗つたもの、縣内の各種大工業會社にも多數の顧客先を有し、同工場の發展に伴ふ上村氏の人物も倍々延びてゆく一方である。

## 濱田龜太郎氏

高知市に於ける化粧品、小間物の屈指の卸問屋として店運日に隆々たる、紺屋町の濱田商店主龜太郎氏の如きも、蓋し一代の成功者であらう。明治二十年香美郡赤岡町の米穀商に生れ、城山高等小學校卒業後十八歳の時に高知、當時市内播磨屋町の小間物店隅田金之助商店に店員奉公したが振出しである。廿三歳の折、一千圓を資本に新町田淵に化粧品商を開業した頃は、車を曳いて香北、美良布方面まで行商する氏の精勵ぶりは、『凍る間もなし水車』の例へ、徐々に商賣は發展を見たが、約十年後同業の有志等と圖つて土佐商工株式會社を設立し是が重役として約七年間必死の努力を傾け會社の基礎漸くに定まるや辭して再び播磨屋町に獨立開業し更に昭和十二年春現在の所に店舗を移

轉擴張した、今や濱田商店の名は全縣下同業者間に普ねく知られたる程廣範の得意先を有し、阪神の一流問屋と取引して日々繁盛を示してゐる。

氏の今日に到るまでには、照衛夫人の内助の功も亦聞へ高いが、養嗣子幸次郎氏(二六)の縣立高知工業學校卒業後、神戸製鋼所に入つて大いに前途を囑目され乍ら、翻然歸郷昨日の洋服を前垂れ姿に改めて家業を輔けるあたり、又與つて大いに力あり、お蔭で龜太郎氏に漸く趣味の謠曲、盆栽を娛しむの余暇を見出したあたり、家庭も又和氣霽々である。

## 林田茂彌氏

今、隆盛の一途を辿る高知信用組合創設の功勞者の一人として林田茂彌氏の名は斷じて見逃すべからざる存在である。遠く大正も未だ十年の初め、當時没落の悲運にあつた高知無盡會社の整理に任じて才腕縦横を揮ふ林田氏の人物を見込んだ、元高知市長松尾富功祿氏の下に參じて、末だ海物やら山の物やら目鼻のあがぬ高知信用組合の創立に奔走する二年、漸くその創設なるや其儘迎へられて組合に止まり、爾來十有數年、中島和三、一柳喜之助、小川澄夫氏の現在に到る三代の組合長のもとに仕へて、貸付課長の樞輔を占むる氏はまさに高知信用組合の大久保彦左衛門である、人

となり清廉にして剛腹なる、今人材雲の如き同組合内にあつても断然一異色ある存在として、組合員の信頼も一段と厚い誠にうつてつけの信組人である。

香美郡美良布村菲生野の出身高等小學校卒業後は土地の私塾で勉學したもの、山砲兵伍長の肩書を有する事は人の餘り知らぬところであるが、其後安藝郡馬路の小林區署に勤め、後東京に本店を持つ一丸木材會社の大阪支店長から本店の支配人に任ぜられたが過去の経歴である。趣味としては古書齋を愛し其鑑定眼は玄人の域にあると、夫人は長岡郡長岡村二宮治太郎氏の女、子嗣は未だ小學校にあるが、長女は縣立第一高女に在學中。

## 松岡佐太郎氏

氏が産れた明治九年の頃、まして芝天が相撲の土俵を名物にした下田川の上流、長岡郡稻生村あたりの農家では子供の教育といへば中學は愚か小學校でさへ無用視したものであつた。だが、村でも中農の家と一人子である氏の懇請によつて當時の高知一中に學ぶ事を得たが不幸病氣の爲中途退學後は、どこまでも向學心に燃へる氏の爲に、いゝ師父たりし人は隣村十市の神職宮地某氏であつた。それ程に既に當時の所謂新人として知られた氏は二十歳台に於て、宛かも日露戦争の最中居村

の村長に推され、大いに新人ぶりを發揮したものだつたが、三十二歳の頃には縣會議員に推されて當選、今でこそ珍らしいが、當時の少壯議員として随分持てたもの、そんな關係で知り合つた越知の岡林起盛氏や介良の鍋島銈夫氏等と製絲會社を創立、一時は大いに儲けもしたが、好況の反動を喰つて失敗もした。一面高知農工銀行の専務取締役、土佐銀行の常務取締役として縣地財界にも君臨した。大正十四年頃故信清權馬氏の主宰する城東商業を育む、城東講會の趣旨に共鳴するところあつて入會専務理事となり同講をして飽く迄堅實な講會としての發展に盡すところ多く、半面城商今日の盛大の基を築いた裏面の人として推賞するに足る人物である。未だこれからが氏の大成時代だ。長男の唯男(三六)氏は家に、二男暉英(三三)氏は東京農大卒業後台灣總督府に勤務後歸縣縣農會に在り、三男宏(三六)氏は城北中學から日本大學に學び、今東寶映画の本社に、長女徳(三三)さんは、陸軍歩兵少佐橋詰利龜氏夫人にと家運は倍々隆昌である。

## 植田日出雄氏

七轉八起、人生の運命ほど亦圖り難いものはない。植田氏はまだ少年の頃、遠く將來の大實業家を志して土佐貯蓄銀行に給仕として入り、つぶさに辛酸を嘗むる七年、漸く見習行員として銀行家

へチョツピリ毛の生へた程度ではあつたが氏にすれば漸く希望の一段階に到着したもの、サア是からだと大いに發奮の掌に唾したとたん、噫何たる悲慘ぞ、當時吾川郡名野川尋常小學校の校長たりし氏の嚴父の急逝を見んとは、嚴父が郷黨に讃仰された清廉の教育家であつた丈に決して富める家庭でなかつた氏一家は、當然生活の重荷は未だ二十歳の氏の上にかゝつて來た。斯うなると、未來の大銀行家たらん氏の決心も大いにぐらつかざるを得ないに到つたと言ふは、即ち未だ銀行家の卵では到底一家を支ふる丈の収入は、今日の爲に斷じて望み得ざる薄給にあつたからである。

茲に於て未だ幼い弟妹を養ふが爲に全責任を双肩に負ふた氏は、目的を一轉して収入の多い職業へ走つた結果、或は生絲聯合會に、或は何にと惡戰苦闘、よく一家を維持して弟妹それらの教育も立派になし遂げほつと一息吐いたのが昭和八年である。この時氏は漸く最初の目的に近い高知信用組合に入り、着々堅實な地歩を築いて現在の預金課長の重任に到つた氏の信用組合に於ける足跡を顧みれば惜しむべし青雲の頃、若しあの儘に氏を銀行界に置かんか、その大成は大いに見えるべきであるを容易に察し得らるべき筈である。それ程に氏の仕事に對する熱と努力は敬服するに足るものがあり、信用組合内でも更に大いなる未來が囑望されてゐる氏である。

趣味は閑暇の鮎釣り、終日長竿を操つて銀鱗漸く五尾が、父君今までのレコードですとは、縣立第一高女を卒つて、茶道、生花、琴曲に堪能の長女鹿州子(三)嬢が囁きといへばこの方は仕事程に

行かぬもの……高知市潮江新田町出身。

## 久馬之助氏

土佐造船業の本場、長岡郡三里村種崎に大規模の造船所を持つ當主、桃の名所であるこゝの濱に生へ抜けの人で當年六十二歳と云ふが未だかくしやく壯者を凌ぐ元氣であり、多數骨つ節の荒いのを顔の先一つで使つてゐる貫祿は如何みても濱の親分である、十二歳の時同村平田彌太郎氏方へ叩き大工の弟子入りをしたが、どこか違つた人間を見込まれて久家を繼ぎ、元縣會議員で濱の重鎮である池川力太郎氏の令妹を夫人に迎へてゐる。

歐洲戦亂の好況時代には儲け頭の筆頭と美望の指をくはへられたものだったが、其後に來た反動的不況には随分痛い目も喰つたけれど、何糞ツと云ふ氏一流の頑張りが造船所の屋台ツ骨にビク揺ぎも見せず、倍々堅實の一途を辿つて今日の隆盛を見てゐる譯、人間は律氣で事業一方、寡言實行の人であり、城東中學を卒へて現に居村役場の収入役を勤めてゐる長男、市商を終つて比律賓ダバオ嶋の古川拓殖會社に活躍する次男の二氏を樂しみ、長女は日本紙業高知支店の池氏に嫁し、二女は現に縣立第一高女に在學中。



## 山本猪助氏

槌の音、鑿の音が賑やかに、年中休みなく響いてくる長岡郡三里村種崎の造船業で、傍ら宏大なる鐵工所をも兼營し、先年一萬余圓を投じて建設した算盤ドックは縣外の大造船所のそれと比較して決して劣らない壯大完全のものと言はれ、土佐造船界の爲に萬丈の氣を吐いてゐる。氏の嚴父彌吉氏も造船業を營んで居たが、猪助氏が九歳の折に逝去一時廢業の已むなきに到つたものを、氏は幼少からこの父業を繼ぐべく志し、十四歳の時弟子入りをしたのを皮切りに、其後久造船所に入つて實地の腕を叩き上げ、二十三歳にして漸く獨立の旗あげをした。その初仕事は明治三十四年に市内廿代町入交太藏氏の帆船を造つたのが、意外にも海運界に好評で、諸方に山本造船所の名聲次第に高く例の世界大戰の好況時には勿論大發展をみて、あらゆる設備を完うしたものだつたが、次いで來た恐慌時代をもよく乗切り廢業績出の同業者を尻目に益々事業の基礎を鞏固にし、現在では創業當時に比して工場面積など約四倍以上の膨脹ぶりを見せ、目下海運界の好調に棹して景氣はいよ／＼の上々である。長男寅喜氏も亦父祖の業を繼ぎ東京工手學校造船科に學んで一時藤永田造船所に勤めたが現在獨立して大阪市浪速區難波島に山本造船所を獨力經營、二男登氏も同校終へて大阪浦部

鐵工造船所に入り才幹を謳はれたが、今は長兄の業を輔けてゐる。現高知市會議員溝淵吉衛氏夫人は氏の二女である。

## 井上峰吉氏

お城から東の呉服商としては田舎に惜しい店を持つ長岡郡後免町の紳商、明治二十三年に藝東室戸岬町に生れて、破れ行李を一つ擔いで先代の井上商店へ奉公に來たものだが、その誠實と天稟の商才を愛されて婿養子に直り倍々店を發展に導いて數萬の財をでつち上げた立志傳中の人である。人と交つて圓滿玲瓏の温厚人、出入商人の端までにいゝ且那樣だと慕はれてゐる、二女艶子さんは土佐高女卒業後お針にいそしむ花嫁修業中、三女博子(ご)さんは土佐高女に通つてゐられる。

## 須藤治美氏

安藝郡安藝町の助役、同町在郷軍人分會長として郷黨に重きを爲す氏は年齒未だ四十、溢れる才幹と巨富を擁して更に將來の大成へますます／＼伸びんとする有爲の人物である。氏は幼時嚴父を失ひ

縣立安藝中學校を卒へて以來、專念先代の築きし家産を守り、殖林事業に志して山林の開発に大いに努力した結果現在同郡東川村方面に所有する廣大な山林は木材業者の垂涎禁じ得ない大した價値のものと言はれてゐる。善通寺の山砲聯隊を出て、陸軍砲兵少尉の肩書を有し、現に郡在郷軍人分會長に就任の交渉を受けてゐる程、又これ丈の巨富を擁し乍ら、氏の人格は聊かも高ぶり傲る事なく、人と交つて極めて平民的に如才なくその人と爲りは頗る好評である。在隊當時みっちり練習した乗馬術は、ます／＼堂に入つて白馬銀鞍の颯爽たる風姿を今でも度々見受ける他に、いよ／＼出で、いよ／＼多趣味、寫眞をよくし、喜多流の謡曲に堪能、殊に書畫、骨董、刀劍を愛するその鑑識眼は玄人はだしの域に達すると云ふ、長女美賀さんは女學校に在學中、勉、洋三の二君は小學校にあつて何れも秀才の聞へが高い。

## 川久保泰氏

俗に『野市の赤膏藥』と呼ばれる皮膚病特效藥の本舗、香美郡佐古村川久保醫院の院長である。赤膏藥は川久保氏の家傳藥として廣く世に知られてゐるが、泰先生の釣道樂と狩獵すきも又近郷誰知らぬ者もない玄人はだしの名人、性豪腹恬淡で本業の醫師の方は、まるで算盤におかぬ仁術型、

それでゐて大正十二年東京慈惠醫大の出身者として決して只の凡人でない丈に郷黨の評判は大したものである。奥様は香美郡山田町岡本岩太郎氏の長女で泰子さん、夫君に似て慈悲心の深い方で人々の尊敬を一心に集めてある、城東中學と縣立第一高女に在學中の令嬢令息の外、二男二女の子實に恵まれた一家は平和そのもの、有様である。

## 岩井寛氏

本場の松茸と龍河洞で名高い香美郡佐古村に、も一つ岩井氏を加へて村の三名物とする。村會議員、消防組頭、前縣信幹事、在郷軍人分會の分會長を経て顧問と言ふ、殆んど村の各譽職が一切を一手にひつくるめて居ると言ふ意味に於ける名物では決してない、佐古の松茸が他處のものに較べて更に一段の香氣を有するところが珍重されると等しく、氏の人物が斷じてありふれの村の顔役型に非ずごこまでも眞摯な奮闘家であり、溫和の中に一種胃すべからざる威嚴を存するところに於て自然に備はる人徳に満つると共に、同村信用販賣購買利用組合に創立以來の専務理事として就任し組合を泰山の安きに置いて獻心的努力が村民間に感謝の的となりその崇敬の中心となつてゐるの。明治二十九年、同村西佐古の農家に生れて、商來四十餘年を一意村の開発の爲に盡してきた人と言

つても過言あるまい。娛しきは養鶏、夫人は同郡片地村亡鍵山象一郎氏の息女で、世子佐武郎氏は城東中學から未來の將軍を望みて陸軍士官學校に入學、他に二男一女あり。

## 武内利張氏

明治二十年三月吾川郡大崎村川口に生れ、岡山醫學専門學校を大正三年に卒業した醫學士、大正十三年から高知市追手筋に病院を開業今日に到る。長岡郡本山町出身の醫博桑名省郎氏の令姉である夫人との間に實に六男三女の子福長者、まづ長男一郎君は九州帝大醫科に在學中、二男克二郎君は早稻田大學商科にあり、次の啓三郎君は城東中學に、四五六男と第三小學校に通學中、長女澤さんは生後間もなく死亡、二女貞子さんは縣立第一高女を卒へて更に同校研究科を終へ、三女晴さんは現に縣立第一高女に學半ばで、尙母堂美津刀自(五才)も健在、家庭は和やかな春風を奏でてゐる

## 山本豊吉氏

由來人材相次ぐ四國銀行常務取締役として温厚玉の如き定型的銀行家として縣財界に鳴つてゐる

氏は明治二十二年東京市赤坂區に生れ明治の末期明大法科専門部を卒へて安田銀行に奉職、米澤、青森兩縣の同行支店長を経て大正十五年三月大連市に於ける安田系の正隆銀行支配人に、昭和七年には取締役も兼ねたが、同行が新興滿洲國に引繼がれた後、昨十二年一月に四國銀行の常務取締役として來任今日に及んで居るが、同行五百の行員がこの寡言沈黙の人の前に期せずして脱帽敬意を表する程、一と口に言へば自然に人徳を備へた人で、又その部下を愛する事の切なる、同行常務にかつて見ざる人情重役と言はれてゐる。御趣味はと問へばゴルフと碁だと答へる。一男二女ありて長子榮一君は高知高等學校二年に、長女輝子さんは縣立第一高女に、二女みわ子さんは尋常四年にそれ／＼在學中。

## 森岡勇氏

安藝郡土居村は安藝町を距る北へ數丁、清流伊尾木川の太平洋に注ぐを一眸におさむる處。此の趣味豊かなる平和郷に木の香新らしく最近新築をした病院の當主、かつて同村に村民の信望厚かりし父君の業を繼いで、東京慈惠醫大卒業後、病む人々の爲に生れ故郷に踏み止まつた人だけに、人々の信頼は逝ける嚴父にも劣らないと云ふ。三厦樓と號して俳句をよくし、觀世の謡曲に堪能、土

佐郡一宮村の醫師恒石氏の息女で現に香美郡赤岡町のこれも醫師恒石賢一郎氏の長姉を夫人とし、安藝中在學中の長男敏夫君(二七)、土佐中學に學ぶ次男正士君の外に一男一女、濃厚謹直なる人、家庭はいつも春風胎蕩である。

## 常光競氏

土佐實業界の梟雄として知られた故西原直方氏が、やがては堂々たる邸宅を建築せんとして地をトした大川筋の廣大なる地所も、權花一朝氏の没落と共に徒らにその外塀を残すのみ、それも星霜十數年、土は落ち石は崩れて草蓬々たる跡へ、たしか一昨々年頃、古鐵商常光商店商品置場の大看板が掲げられ、軌道の古物や自動車の廢品など山の如くに古鐵を積み上げたのを見た人々は、同商店主競氏がさきの日迄高知信用組合の貸付主任として勤務してゐたのを知る爲に、それ程の鐵屑を如何するか、所詮は土族の商法で……と蔭口をきいた者も尠くは無かつた筈である。

それが如何か、中一年をいて勃發した日支事變の而も長期戰時體制の國策は、果然古鐵の暴騰又暴騰で、土族の商法は一轉大當ての巨利を博するに到つたのである。氏は當年腕盛りの四十一歳、高岡郡久禮町の出身で、郷里の小學校を卒業後將來の辯護士を志して全くの獨學を續け、十九歳の

時小學教員檢定試験に合格、一時同郡船戸小學校に教鞭をとつてゐたが、後轉身、當時の土佐銀行に入つて窪川、中村、室戸の各支店を歴任、その高銀と合併後は現在の四國銀行室戸支店に勤務中望まれて高知信用組合に入り大いに才幹を發揮して遂に貸付主任に迄累進したものの、深く感ずる所あつた氏は現在の商賣に着眼、組合を辭して、縣地同業の雄下知町の尾坂合資會社に入社斯業の實地を研究の後、昭和十年大川筋に開業、今回の大成功をかち得た次第である。家庭は廣島縣立高女出身の夫人との間に二男あり、都山流の尺八をよくして師範免許を受け、時折りは夫人が奏でる箏曲との合奏に床しい團囀を見せてゐる。

## 濱口千尋氏

紙一枚の証文に巨萬の金が物を言ふその大切な印判商として市内東種崎町に堂々たる店舗を張る濱口水昌堂の主人である同氏は、又印形彫刻師としても非凡の手腕を持つ人である。氏は明治廿二年高知市本町に生れ、高等小學卒業後斯業に志して遠くその修業に當時東都第一流の印刻店たる細川商店の大阪支店に入り、二十一歳の春迄營々小刀一本に精魂を打込んで苦心空しからず、歸郷して新京橋に獨立開業した時は最早押しも押されぬ第一流の印判師であつた。其後現在の場所に移

つて十有五年、同業の雄として搖がぬ店の礎を築くと共に氏の技術も亦一段の進歩向上を見るに到つた。即ち昭和八年の秋には氏が多年の努力研究による珊瑚の彫刻に成功して獨得の技術を譲はれ珊瑚の印判彫刻は郷土藝術の誇りとして廣く天下に喧傳された結果、西園寺公、故齊藤實、若槻禮次郎、鈴木喜三郎、鳩山一郎、濱口雄幸、廣田弘毅、の各名士を始め、荒木、永野各大將の印章を彫刻するに到つた氏の光榮は餘りにも有名な話であり、珊瑚加工界に一新機軸を出した氏の名譽と共に、とこしへに朽ちざるものがあらう。名人肌によく見る寡言温厚の士、今や長男一氏(一七)は家業を助け、二男瑞穂氏は光輝ある國家の干城として應召中、長女志津子さんは縣立第二高女出身の才媛、二女顯子さんは小學校在學中と家運の前途は洋々である。

## 岩井儀氏

泰山は土壤を譲らず、故に高し。黄河は細流を擇ばず、故に深し。羅馬は一日にして成らずの古言もある。元來人間の失敗といふものは一足飛にやらうとするから生ずる。商業の卒業生が小僧扱ひされるのを嫌がるやうでは、到底上役の位地に達し得ない。

岩井儀氏は明治二十五年十二月八日香美郡佐古村西佐古に生る。昭和十一年縣會議員に當選され

たが、氏の父君は同村々長を二期勤務、さうして郡會議員、郡參事會員として、郡自治の爲め敏腕を揮はれた少壯議員であり、なほ郡町村長會長を勤め、三十六歳で逝去された關係上、儀氏の縣會議員は一足飛の思ひをするものが無いでもあるまいが、しかし氏が縣會議員となるまでは幾多の徑路を辿り來つてゐる。氏は舊縣立第二中學出である。それから村役場に入った。獅々は兎を搏つにも全力を注ぐ。氏は渾身の力を傾けて勤務中、日下郡長に見込まれて郡役所書記となつた。後進拔擢の意味はこゝに存する。徒らに大望を抱いて先進が取り合つて呉れぬと、恨を向けて自暴自棄するが如きは、よほどの間違である。かゝる間違から脱出せる氏は郡役所書記に勤務八年。郡役所廢止前に辭職され、大正十五年六月に、神職、處女、教育會を主体とせる香美郡教化團を創設、その團長に推舉された。また青年團長、在郷軍人會長等勤務。昭和四年二月香南社事務理事となり、不況時代に動搖せる組合員に組合精神を理解せしめぬなど、その功勞は實に多大を極めてゐる。氏はかゝる徑路を辿り來つて縣會議員當選の榮を得たものである。教化團長は現在も就任されてゐる。如才ない圓滿玲瓏の手腕家である。趣味は各方面に涉つてゐる。夫人は安藝郡室戸町釣井鯛次郎氏長女、高坂高文出身である。長男要君(一八)は城東中學卒業、三重高等農業學校に在學中。なほ一女がある。

## 國吉清次氏

人間の出世に主観と客観がある。工業出が工業方面に活躍し、商業出が實業方面に活動するのは客観である。文學研究の芳澤謙吉氏が外交官となり、荒木貞夫氏が大将となり、土佐の木村久壽彌太氏が三菱理事となり、札幌農科出の内村鑑三氏が宗教家となるなど、それは主観である。客観的出世は心物に相應する。主観的出世は心が主になつて物を心に應ぜしむる。

國吉清次氏は主観出世の一人である。氏は市要法寺町に生れ、後江ノ口に住居し、現在は北奉公人町下一丁目に醫を開業してゐる。先代龜之助氏は赤岡町出身である。清次氏が市商四年の時、父君が死亡されたので、止むを得ず退學。それから醫師を志して奮勵獨學された。大正三年五月、前期後期實地の三ツに合格。その時二十三歳。大正十三年現地開業今日に至つてゐる。主観的出生の人には意氣識見凡ならざるものがある。昭和六年の城北問題騒動當時、三年在學の長男はその渦中に入りし關係上、氏は奮然第一線に活躍。自宅二階を私塾として提供、籠城的の勉強をさすなど、温厚寡言の裡に含まれる決斷力と義侠心は、實に偉大なものである。支那の陶淵明は蘭を東籬の下に採りて悠然南山を見る名利超越の人である。大菊と寫眞を趣味とされる氏は、その性格を發露せ

## 福田早苗氏

しめてゐる。

夫人は高岡郡北原村の河野清水氏三女。長男朋重君(三)は日本大學醫學科在學。次弟美知夫君(三)は米澤高等工業學校在學。三男雄三君は城東中學在學。長女淑子さん(三)は土佐高女卒業、本年市築屋敷工學士佐野孝雄氏に嫁ぐ。二女英子さんは高坂高女在學。外に二女あり小學在學。

師範出は一生教員かといふに、必ずしもさうでない。教員をして居つても他に翻るものがある。高知師範出の鷺野米次郎氏は代議士となり京都市長にもなつた。高岡郡半山の里から蹶起して警察部長となり、中井弘知事時代の滋賀縣警察部長を最後に實業界に轉向し、また代議士となり、國務大臣の椅子を占めた片岡直温氏も高知師範出である。兎も角、非凡の才力と氣魄を有する師範出は碌々として教員の椅子に一生を送るものでないやうに看取される。橋田早苗氏もその一例である。

氏の舊姓は水田氏。明治十一年八月十五日香美郡佐古村に生る。三十五年師範學校卒業。野市尋常高等小學校を振出しに、山田小學、佐岡小學、吉川小學の各校に勤められた。その間十八年。大正十三年に佐古村長となる。その時代に於ける氏の活躍は日さましく、陣頭に立つて村内各部落を

巡講後、養蠶熱心家四十五名の創立委員を委嘱し昭和二年一月二十日委員会を開き、佐古、野市、明治、片地を加へて香南社を創立、組合長に任じ、四月二十日退職、六年五月十八日再任され、更に奮勵努力、吉川、三島、田村、岩村の數ヶ村の養蠶家を加へ、釜數百七十釜の盛觀を極むるに至つた。

長男義郎氏(三)は父君の血を受けた才氣卓抜の東大法科出で、文部省圖書局に勤務してゐる。その夫人は高知新聞社々長野中楠吉氏の長女である。長女幸子さんは高岡郡窪川町岩本寺、窪氏に嫁ぐ

## 西本義盛氏

西本義盛氏が園藝(特産ワサビ栽培)と虹鱒養殖を趣味とするところは大いに注目に値する、氏の趣味は公益を含んでゐる。その虹鱒養殖場の香美郡横山村は山、山、谷また谷、淵また淵の環境で高板山は群峰の上に屹立して天地自然の靈氣を吞吐してゐる。明治二十一年十一月一日、横山村大栃町に生れた西本義盛氏が、玖摩川の流れ、阿蘇山の烟の熊本にあこがれて、その醫專に修學卒業されたのは、自然の靈氣の東西呼應だらう。現地開業は二十九歳の時である。熊本出身の北里醫學博士は樞密顧問官となり、山深く水豊かな能津に生を享けた醫師町田且龍氏は代議士となり

土佐政友支部の柱石となる。山水の環境に生るゝものは、英氣渾々、政治方面に涉らざらんとするも能はず。西本氏は昭和六年縣會議員に當選、村議三回、香北民政黨の重鎮である。恬淡にして剛腹なるその人物は、山と水の地に育成された性格の表徴をよく証據立てゝゐる。

## 森本泰臣氏

香美郡美良布村は美良布の瀧で有名である。さうして山は峨々、物部川は滾々と流る。その地に出現せる森本泰臣氏は剛腹恬淡の人である。その剛腹恬淡の性格は比を苦學生たらしめた。苦學生に鈍物なし、氏もまた私立京都獨逸語學校を卒業し、明治四十三年檢定試験合格、大正四年歸縣現在に及んでゐる。その特徴は注目に値する。醫師の多くは醫大の出身ならざるはなき世の中に氏の如き一流變りの特徴は、けだし奇觀である。美良布の瀧は森然として天地の奇觀を呈してゐる。氏の人生もまた奇觀である。美良布に生れた大石馨氏は小學時代に鶯の題で作文を綴つたが、それに鐵砲で梅ヶ枝に囀る鶯を射殺したといふ文句があつて教師を驚かした奇豪の人である。日清戦争に旗鑑松嶋乗組の少尉として激戰激闘、壯烈極まる戦死を遂げ、大嶋岬招魂社の砲彈戴碑に偉勳を物語つてゐる。少尉の氣魄は美良布の瀧の如く、森本氏の氣魄も美良布の瀧の如く、人生の巷に奔

躍する。平地を凡々と流るゝ水に奇観は見られない。氏の趣味は釣、圍碁、玉突等多方面に涉つてゐる。長男喜郎氏(二七)は城東中學卒業、大阪市塗料會社小川商店に勤務。二男敏夫氏(三三)は長崎醫科大學在學、葦生の奥から奇観を極めつゝ滔々と奔流せる物部川は渾然たる巨流となつて海に注ぐ。二男敏夫氏の父業を繼續する時は、巨流となつて世に現はるゝだらう。

## 野口直通氏

昔、岡豊山に城を築いて土佐全州を睥睨し、朝に一城を抜いて夕に一壘、凜然たる威風の下に山川草木も靡かざるはなく、大拳鞭を揮つて四國一統を敢行せる長曾我部元親は、宛然南海のナポレオンである。ナポレオンの威風は今なほアルプスに存し、元親の威風は今なほ岡豊山に留まる。岡豊山小なりと雖も元親の雄威を留めて千古に雄視す。

野口直通氏は岡豊山で有名なる長岡郡岡豊村に生る。當年四十三歳、大正二年に海南中學を卒業。朝倉へ入隊したのは當然の成行である。然るに海南出身に都門有名の實業家がある。その人を評した吉田校長の言はなか／＼徹底してゐる。人生の崇ひところは氣魄である。その氣魄が武に躍らうが算盤に響かうが、筆に漲らうが、何んに發現されやうが、そこは人間各自の天分で決して限定さる

べきものでない。海南出身の算盤英雄もまた愉快ではないか、さういう意味の言葉を吉田校長は發露されたといふ。劍は無機物の金屬に過ぎない。劍の尊いのは氣魄の宿りである。肅々として劍を拜するのは氣魄の感激である。朝倉を除隊して後神戸三菱造船株式會社に奮勵、大正十二年歸りて農事に力行の野口氏にも、吉田校長の言葉が實現され、平々凡々たる鍬や鉋の人にあらざる特徴を物語つてゐる。収入役、助役を経て昭和十年村長となり、同十二年三月病氣退職、精敢なる氣魄の裡にも温厚篤實の玉の滴りが加味された性格の持主である。

## 八井田寛氏

加藤清正の熊本城は西南戦争で有名を加へ、西南戦争の熊本城は谷少将でます／＼著名になつてゐる。最近少将の銅像が熊本城頭に立つた。阿蘇山は巍峨として天空に濃煙を吐いてゐる。在照の土佐人は何んとなく意氣軒昂の概がある。往年由比質氏は五高の教授となり、溝淵進馬氏は同校長となる。現在の熊本醫大長は佐川の山崎正董博士である。谷將軍の邸を持つ市久万町の現在高千穂學校長川田鐵彌氏などは、熊本にあこがれてわざ／＼五高に入學された。また高知高校入學の熊本人も少からず。土佐と熊本とは何となく意氣が投合する。八井田寛氏は熊本醫學專門學校を卒業の



醫學博士で、卒業後父君理氏の許で開業されたが、昭和五年十一月香美郡山田町に轉宅、十年一月一日新築に移り、八井田産婦人科病院長として奮勵されてゐる。明治二十二年一月三十日長岡郡長岡村の出生、温厚の人物である。夫人は長岡郡新改村櫻谷大氏の二女、土佐高女出身愛嬢。禮子（アヤコ）さん（二六）は縣立第一高女在學、長男仁君（二三）は小學在學、なほ二男晋君がある。

## 横田 龜吉氏

浮草は合ふてもまた離る。それは外物作用であるからだ。浮草は風の動きで離れもし合ひもする。膠漆の合着は質と質との結合だから固い。都合上の合同は破れ易い。兄弟の共同ほど堅牢なものはない、日本國民は一族兄弟である、故に日本國民の學國一致は世界に比類がない。國民一致の事業は隆々と榮へ、一家一体の事業は油々と發酵する。横田龜吉氏は明治十八年四月十五日、吾川郡長濱町横田野に生る。昨年十九反、本年二十二反と、吾南煙草栽培の先驅者として發展してゐるのは、幸次、慶壽、六太郎、龜吉氏四人兄弟共同の下に父君の遺言を實行せる結果である。西瓜の率先栽培にも好成績を挙げ、また漁業にも活動し、朝は星をいただいて出で、夕は月を踏んで歸るといふ謹直奮勵の努力振りである。龜吉氏は前町會議員、現總代評定員の肩書がある。夫人は

浦戸村山崎氏長女、神佛の信仰深い人である。長男成三郎氏（二六）は長濱高等小學校卒業、父君の片腕となつて働かれ、また父君と共に弟妹の育英などに全力を傾注するなど、一族一体の精神を發露せしめてゐる。二男辰吉氏（二三）は高知工業學校電氣科卒業、栃木縣日立製作所に勤務、三男勇吉氏（一九）は高知工業卒業、同じく日立製作所に入り、四男は高知工業電氣科在學、長女美義さん（二六）は縣立第一高女及び師範二部卒業、教員勤務一ヶ年で、吾川郡弘岡村小學教員安並氏に嫁ぎ、二女菊美さん（二三）は師範二部出、小學教員である。三女君子さん（二七）は縣立第二高女在學、四女は小學在學、一家一族擧つて發展せる横田家の如きは優良家庭として推擧の價値十分である。

## 永井 福吉氏

人間の天分は争はれないもので、軍人主眼の海南學校卒業でも實業家となり、或は醫家となるものがある。それらの人々の精神氣魄は實に立派なものである。公園花壇の一隅に星野秀太郎氏の記念碑がある。星野氏の縣立病院長時代（現在の高知病院）に流行チブスが香長あたりを襲ひ猖獗を極めたので、氏は敢然身を挺してその危険境を馳驅しつゝ撲滅に努力する中、遂に自らも同病に胃され犠牲となつた。氏の如きは醫界の軍人として敢然剛毅の魂を永久へに公園花壇の記念碑に傳へて

る。

永井福吉氏が海南校出の身を京都府立醫科大學にて修學卒業、長岡郡大津村の醫師として出現されてゐるのは、星野氏の蘇りとも首肯され、精神氣魄の凡ならざるところがある。幡多郡伊豆田村下ノ加江出身、先代谷太郎氏の次男である。當年四十八歳。夫人は長岡郡大津村田邊嶋醫師高野楠吉氏息女、長男誠一君は城東中學五年在學、次男和夫君は女子師範附屬小學四年在學、長女節子さんは縣立第二高女出身研究科修學、書畫の趣味を持つ。

## 野村好久氏

野村茂久馬氏に二世野村の好之氏あり、三世野村の好久氏あり、野村組王國の基礎は磐石よりも堅く、將來倍々發展の永續性を持つてゐる。好久氏は明治四十四年四月十八日、安藝那奈半利町に生る(二十八歳)、三菱王國の岩崎彌太郎男は少年時代その出生地の井ノ口を數里隔てた奈半利川へ遊びに行つたといふ。鬱蒼天を掩ふ魚梁瀬の森林より水源を發する奈半利川は滾々と奔流して太平洋に注ぐ。以て香魚を産し、以て人物を涵養する。奈半利川の香魚は美味この上もなく、奈半利川の滾流に養成さる人物は一代の棟梁となる。岩崎彌太郎あり、中岡慎太郎あり、土佐の三菱たる野村王國

の野村茂久馬氏あり、三世好久氏何ぞ凡鱗常介ならんやだ。昭和五年三月、父君出身校の城東中學卒業、九年三月大分高等商業學校卒業、その後約半期間野村組自動車部勤務、それから高知驛前野村運送店を個人經營として自ら經營中、野村組より全然分離、鐵道省指定店として昭和十二年一月二十六日以降鐵道關係のみの運送取扱を爲し、更に宅扱をもしてゐる。將來の展開見るべきものがあらう。温厚の青年紳士として世評噴々、前途を囑望されてゐる。スポーツマンとして野球に興味深く、一般に運動を好んでゐる。夫人華子さん(五)は改田武馬氏の女、甲南高等女學校卒業。比紗美さんといふ本年三歳の愛嬢がある。

## 曾我長次氏

香美郡山田町東町に製絲、洋品、反物商を營むわが曾我長次氏も立志傳中の人である。生れは長岡郡久禮田村、小學校に學んだきり、父君が死亡したので十二歳の時山田町に来て双物の行商を始め夜は芝居小屋の中賣りをやつて苦闘後、漸く生絲屑物を買ふだけの金を得たので廿歳の時蘭仲買を始めたが苦難を突破した人だけに商才にも丈けてゐた。やがて一家を建てダルマ製絲をやり漸次發展して機械製絲に改め宏壯な家を新築し堂々たる店舗を張るに至つたのである。公職は縣商價協定

委員、縣製絲業組合評議員、且つ山田消防東部組頭。決斷力の強い人で趣味は釣魚(イダ釣)將棋。長女は土佐高女出、養子さんは香美郡三嶋村出身の長尾氏。十九歳で土佐銀行入社山田支店次席となり高銀と合併したのを機に廿七歳で退き現在養家前で洋物、反物を開業隆盛である。温厚の紳商。

## 原 祐之氏

澎湃たる組合製絲の時代的波濤に乗じて縣下に續出する組合の中でも鏡繭絲販賣購買利用組合はその鞏固さに於て、その範圍とする香北高地八ヶ村(大楠植、片地、佐岡、曉霞、在所、横山、上蕪生、美良布)の如く高く群を抜いてゐる。

その育ての親たり護り神として専務理事の地位にすわるわが原祐之氏は明治廿九年十二月十八日生、片地村町田出身(現住)で市商四年を修了、東京明治學院に學び大正四年一年志願として入隊のち歸村して村助役となり、漸くにして氏の産業界に於ける巨歩が始まつた、即ち先づ四國製絲を起してこれに入り經營に當つたが次いで片地製絲を合併、庶務課長となり昭和四年現在の鏡繭絲を組織してその中心となり最新式特許増澤式多條線糸器を新設し二百釜とする大々の改良擴張を行ひ昭和十二年十一月十五日に竣工、前例の無いA格の良品を作つて同組合繭絲のため万丈の氣焰を

あげた等、原氏の輝かしい功績の現れである。前理事長吉村憲氏は不幸戦歿したがその出征中、原氏は理事長代理専務として活動した。尙氏はかつて村農會長、村軍人分會長、村會議員等の公職にあつた。氏は齡不惑を過ぎたばかり香北の繭絲界が將來氏に待つ所甚だ大である。趣味はたゞ事業だけ。長男義彦君は海南中學一年、二男義弘君は八歳、長女敏子(三)さんは第二高女を出で第一高女の研究科を卒業した。

## 横田 龜太郎氏

縣下第一流の實業家として押しも押されぬ西山合名會社のおん大西山龜七氏が、華かな第一線に活躍する蔭には、必ずや力強い銃後の固めが必要である。現在西山合名の牙城を護る人は多いけれども、眞に龜七氏のよき女房役となつて大世帯の台所一切を締め括つてゆく人物は横田龜太郎氏をおいてない。氏は高岡郡須崎町の出身、小學校を卒つて出高、市山田町の森下米穀店に丁稚奉公したのが始まりで、明治三十一年には早くも相生町に獨立の米屋を開業したが、當時から市山農人町に米穀商を營む西山氏と肝膽相照らし、茲に折角の店も捨て、その麾下に參じたりとは言へ事實上に於ける兩雄血盟の握手であつた。

即ち大正七八年の世界大戦による好況時代には西山氏も大いに儲けて今日の基礎を築いたが、横田氏も亦巨利を博した。果然、西山横田の名コンビは斯くして盤石の上になつたのだ。大正八年の暮、今の西山合名會社は両者の共營によつて創立され、氏はその代表社員となつてますます活躍した結果、遂に現在の大西山合名は捏つち上げられた譯である。重ねて言ふが西山氏の如き表面の華美こそなければ、横田氏の如き帷幕の中に策戦を練る名將は、事業界に於ける至寶的存在として重きを爲す所以である。

## 中屋喜之助氏

高知市東種崎町の豪商で巨萬の富を擁する實力家、表に華美を装はず、名利を追はぬところは徹頭徹尾、所謂吐月峯型富豪の典型的人物と誤解される点も尠くないが、實際の氏の人となりは人一倍血あり涙あり、年一回は必ず借家人を集めて大福引を催す等の家主がさうざらにある話しか。張り込んだ其景品の如きも日常必需品を揃へる等細心なる氏の人物が躍動してゐるではないか、第二小學校の崇嚴壯麗なる御眞影奉安殿は中屋氏の寄附にかゝるもの、最近潮江の縣社天満宮に奉獻の總花崗石作り大鳥居は參詣の人々が目を驚ろかせる壯大なものであり、これ等に見ても決して氏が

なみ／＼の富豪でない事がうなづけよう。殊に氏が先年來茶園場方面の貧困者救済に盡してゐる其仁徳は、どこ迄も表面にあつて爲され、表では、出入の仲持某が行爲と秘し隠してゐるのは床しさの極みである。

氏は茶園場町に生れ、先代幸七氏が五十余年の昔に東種に移り住んで、紙雜貨商を営んだのが始まりで、現在の店舗は三十數年前に新築したものである。先代は九十三歳の高齡で逝去したが、其間喜之助氏が刻苦勉勵幾十年の賜によつて遂に今日の産を爲した立志傳中の人、性温厚圓滿の士であるが、惜しむべきは六十四歳の今日迄未だ跡を譲るべき子實に恵まれぬ事である。

## 寺尾岩二郎氏

代々、香美郡赤岡町の富豪として知られ、加持子米一千石の豪華と謳はれた寺尾家も、一朝浮世の荒波に今より約六十年の昔、先代の頃裸一貫に没落したものである。先代はこの頹勢を挽回せんとして同郡横山村大栃に移轉し雜貨商を始めたが、今の岩二郎氏は此當時、即ち明治二十四年六月大栃町で生れ、市立商業卒業後志半ばで逝いた先代の跡を繼いで襲名、朝鮮聯隊に看護兵として入營三等看護長に昇進歸郷後營々家業にいそしむ傍ら、貨物自動車運輸と貸自動車店を兼營してゐるが

氏の事業中何よりも特筆すべきは昭和二年に於ける大柵町水道合資會社の創立で、これより以前大正十四年頃から同村山崎に水源地を求め、資本金三万五千圓を以て事業に着手したところ、俄然地元民の大反對に會ふて一時は會社の前途暗澹たるものがあつたが、飽く迄も初志に屈せざる氏は更に奮勵一番、全くの孤軍奮闘を以て遂に目的を貫徹、其迄水に悩んだ大柵町をして上水道の恩澤を蒙らしめた其功績は蓋し甚大といふべしである。會社は名義上合資會社になつて居るが、事實上氏の經營で同社の代表者であり、さきに内務大臣から衛生功勞者として表彰されるなど氏の功績は不朽のものがある。

氏は二十餘歳の折から村會議員に當選すること四回、昭和四年大柵町に公設消防組の結成さるゝや推されて其組頭となつたが、去る十一年一切の公職を辭し、事業一方に精進して巨萬の財を蓄へ往昔の寺尾家を立派に復活するに到つた。性剛放蕩落俠氣に富み、香北の大親分として斷全重きをなしてゐる。夫人は安藝郡奈半利町中島氏の長女で、長男善男(三)君は同志社高商出身、株式會社四國商會に勤務高知市に現住しその夫人は片地村上村高馬氏の二女で女子師範の出身、二男哲男君は秀才の名高く小學校と土佐中學を首席で卒業高知高等學校に在學中、外に二男がある。

x

x

x

## 西内基八氏

香長平野は土佐の穀倉である。この穀倉はお天道様については香長の肥料王西内基八氏の一擧一笑をうかがひ、豊凶は關つて「カネ利」西内基八商店の肥料の施し様にあるといつても大して過言ではあるまい。肥料の分配まことに農本國に取り重大だ。

西内氏は誠と熱と膽と努力の人である。出身は香美郡野市町、小學校に入學したが貧困のため玉子の買出し乾干魚や青物の行商を爲し小學卒業の際三十圓の貯金をしてゐた。現代人にははせると涙ぐましい生ひ立ちなどといはうが、意志強烈鐵石心の此の少年は屁とは思つてゐなかつた様だ。十三歳丁稚奉公、十六歳京町廣末金物店に入り信用を受け、十七名の店員中から見込まれ獨り東西各郡の集金を托された。が十八歳の時、主人が暇を出さぬといふのを無理から出て山田町に飛んでゆき産聲も高らかに先づ金物商を開店した。これ氏の今日あるの始めにして、後から舞ひ込んで来た肥料は大きい商賣に拘らず金物商は今日も手放さぬ所以である。だがそれは今の話、當時めでたき西内商店の開店に拘らず前主家廣末からは碌々品物を送つてくれず、代りに天は更に試鍊を送つてくれた。運命の神はこの立志青年の金物商になほ試鍊が十分でないと思つたのか、力強い開店呱呱

の聲を遮る様に風雲急なる日露戦前二十一歳入營、大隊本部附となつてゐる中戦端が開かれ日本國と西内君へ最後とも覺ゆる鐵火の洗禮だ。吉永少佐の從卒となつて勇躍國難に赴いた東雞冠山吉永堡壘の奪取戦に於て西内君は齒十三枚、手と腕三ヶ所に負傷して卅八年二月十二日歸國勳八等功七級と左記の賞詞が燦然と輝いた。留守中弟さん政次氏に經營させてあつた店に歸り翌三十九年一般肥料の販賣に乗り出し、現在の宏壯な店を新築した。そして昭和五年には世界的肥料會社獨逸のニトロホス、イー、ゲー商品の販賣開始、ハー、アールレンス會社の技師來縣して香長士三郡に亘り肥料講演會も開かれ、木間宏氏らの講師と共に六十ヶ所に及ぶ講習をして西内基八商店と共に榮ゆる盛事昭和五、六、七年は新肥料普及の時代で西内基八商店も拔群の成績を挙げ肥料革命の波に乗つた。七年には硫燐安の販賣につき三菱商事肥料部の命を受け徳嶋支店長長江徹雄氏來縣、高知縣下で販賣店として囑する人は西内基八氏以外に無いとの話で、他の販賣店は保証金を取つてゐるのに氏に對しては無條件で縣下特約代理店として一手販賣を委ねて行つたものだ。何しろこの製造元は朝鮮窒素肥料會社で朝窠一たび北鮮の一寒村に設立されるや一躍新興工業市となつた程で壯大の規模科學の粹、彼のドイツのメルグゼブルグのロイナ工場と併稱さるゝ世界最大の窒素工場、その硫燐安と硫加燐安と、昭和九年からは同じく三菱拔の南米智利硝石の一手販賣、帝農化研のカルマイト特約販賣と次第に殖え加はつた。

西内氏は大正十年以來山田町商工會長をしてゐる。また町議、香美郡營業收益稅所得稅調査員、山田信用組合理事及監事等をいづれも三期つとめ縣肥料協會評議員、町軍友會副會長、と忙しい。頭腦明敏、思ふことはパンパンいふ。五十六歳の働き盛り。夫人は同町前田正義氏の長女で内助の功少からす長男基博(三)氏は市商出、家業に従事、長女二女は他に嫁し三女美枝(三)さんは土佐高女を出、生花、お茶に堪能である。

## 賞

## 詞

歩兵第四十四聯隊第二中隊

陸軍歩兵一等卒 西田基八

明治三十七年八月二十一日所屬隊旅順要塞Q堡壘突撃ニ際シ一等卒ハ顔面ニ銃創ヲ受ケ未タ繃帶ヲナスノ暇アラサルノ時ニ當リ大隊長ノ重傷ヲ負フヲ見忽チ自己ノ負傷ヲ忘レ彈丸雨飛ノ下ニ在リテ終始大隊長ノ身邊ヲ放レス能ク其ノ看護ニ勉メ遂ニ其危急ヲ救ヒ得タリ 其動作勇敢ニシテ忠實ナリト認ム 仍テ賞詞ヲ授與ス

明治三十七年九月十日

第十一師團長 陸軍中將 正四位勳二等功四級 土屋光春

## 大谷 定氏

當年六十七歳の老醫家、明治三十五年以來安藝郡安藝町に開業して近郊から神の如く崇拜されてゐる人格者、古い長崎醫大（舊醫專）の卒業生で、當時の新知識だった、圓滿の人格へ老來更に一段の磨きがかゝつて、便々たる太鼓腹をゆすつて哄笑するところなど、いかにも親しみ深い好々爺である。稀な子福者で、一男は四國銀行安藝支店に勤務、三男は今次事變に應召出征して名譽の戦傷を受け歸還、四男は土佐中學校に在學してゐるが長女は土佐高女卒業後醫學博士重松尙義氏に嫁ぎ、二女は逝去、三女は得能通貞氏へ、四女は前記重松氏の令弟で福岡大學農理科卒業後台灣製糖會社に職を奉ずる有爲の才子に嫁し、五女は安藝高女を卒へて、自宅に在り、生花、茶道に堪能の名あり、これ程の子寶を娛しみ乍ら、定氏の多趣味なる、書畫骨董の類をいぢくり廻つてゐる。

## 天野市芳氏

高知市若松町に石材商を営む氏は本縣の人でなく、岡山縣小田郡白石嶋の産、約二十數年前、先

代で叔父に當る廣吉氏が、潮江橋の石工々事請負の爲來縣し、工事終了後、余分の石で潮江土居町に石材商を開業以來土佐に居つき、最初の石材輸入商として活躍した頃、市芳氏は郷里から呼ばれて叔父の許で生長した。廣吉氏は、大正七八年の好況時代、折柄出現した廣末常三郎氏を社長とする土佐石材會社と大いに競争してそれこそ血みどろの販賣戰を演じた結果、最後の凱歌を擧げて、いよ／＼土地に居つく決心をなし、店を鐵砲町に移したが後海運の關係から現在の若松町に變つたもので、其逝去後、當時城東商業學校を出たばかり若冠二十一歳の市芳氏が業を繼ぎ、現在石材商としては縣下に於ける第一人者の定評を得る迄には相當の奮闘を續けたものである。大正十五年からは更に補助帆船を建造して京阪及び九州方面に廻漕業も營んで居るが、昭和七年には石材加工業も兼營、品質の優良は既に名ある郷里岡山縣の材料に技術の優秀も亦加へて事業の前途は倍々有望、當年二十八歳の氏の將來と共に更に發展の道程にある。性格淡剛腹、義俠心に富み、岡山出身者中の成功者中に數へられてゐる。

## 谷 博氏

四國銀行の各地支店中、その最も重要な一つである安藝支店に君臨する氏は明治二十年八月の

誕生と言ふから、とつて五十二歳、銀行家としては油の乗りきつた歳であり、同行内でも重きを爲してゐる。香美郡明治村の出身で嚴父は久しく郡長の椅子にあつた名門の出、市立商業を卒つて、故山本忠秀、松尾富功録兩先輩の肝煎りにより明治四十二年四月當時の高知銀行に入つたが、兵役關係で一時退職、翌年四月再び同行に入り、その四國銀行に合併後も引續いて勤務、山田支店を振出しに後免、赤岡、須崎の各支店次席を歴任、大正九年には窪川支店長、十二年には久禮、十四年宿毛昭和二年に田野、四年佐川、七年には更に山田へ、十年宇和島の各支店長を経て、昭和十二年四月現在の安藝支店長に就任今日に到つたものであるが、生へ抜きの銀行家型へ、多年の経験は更に洗練、老成の八面玲瓏、如才ない温厚の人物として行内は勿論、各地到るところの取引先からも好評を以て迎へられてゐる。餘暇には釣と狩獵を娛しみ、嗣子正泰君(三)は城東中學卒業後日本大學豫科に入つたが、中途退いて昭和十年に四國銀行本店に勤務、現在は山田支店詰として將來を嚆望されてゐる。

## 橋田萬之助氏

はじめて西郷降盛に面した坂本龍馬先生が、「西郷は大きく叩けば大きく響き、小さく叩けば小さく

く鳴る」と、勝海舟に語つてゐるが坂本先生自からもそんな人物である。先生が生きてゐたら海軍大将海軍大臣は無論と言ふものが多い。また外務大臣だと言ふものもある。三菱以上の實業家だと言ふものもある。けだし、先生はその何れにも成る人物である。それほど先生の人物は大きい。

橋田萬之助氏は坂本先生と同型の人物である。官界から政黨生活に入れば官界の臭味は消滅し、實業界に入れば實業肌となる。圓満自在、方圓の器に従ふ水の如きものである。従つて官界の人としても、政黨人としても實業の人としても、手腕落々、その行動まことに鮮やかなものがある。昔は士族の商法といつて、零落のどん底に落ちた不運者が、雨後の筍の如く多かつた。即ち士族臭味の拘着せる商賣から、その結果を招いたものである。橋田氏の性格は温厚着實であるが、それは溜池の水ではなく、底知れぬ西郷式或は坂本式の如き深沈大度の胸量である。動けば商機を捉ふるに敏活、商機を捉ふるにも敏活、官機を捉ふるにも敏活、行くところとして圓満自在ならざるはなし。

明治十八年十一月十七日、長岡郡三和村に生る。原次郎署長時代に高知署在勤滿三ヶ年。大窪署一ヶ年。高岡署二ヶ年。安藝署田野派出所勤務巡查部長二ヶ年。大柵に半年間勤務中警部補となり須崎署へ轉任一ヶ年。高知署司法主任一ヶ年餘。東京警察官練習所入所六ヶ月間。安藝署勤務六ヶ月。高知署外勤主任一ヶ年。室戸署長半年。警部に任じ縣保安課首席、高知署首席一ヶ年、室戸分署長一ヶ年、水上署長一ヶ年、大正十一年三月伊野署長、十二年三月退職。後昭和四年より市會議員とし



て現在に及んでゐる。更に政友會支部總務二ヶ年。土佐木材同業組合副組長たりしが昭和十二年退任。現在は高知製材組合組長である。氏は久しき前から製材業を営み、其の基礎鞏固を極め、信用頗る厚く、製材の大部分は朝鮮に輸出しつゝある。趣味は圍碁。

夫人清子さんとの間に二男あり。長男幸夫氏(三)は市商卒業。次男新氏(五)は高知工業卒業。

## 檜谷義廣氏

長岡郡新改村曾我部川の人、若冠未だ三十四歳の氏の名は、土佐の新名所たる若宮温泉の經營者とし、亦有名なる天然鐘乳洞「郷隴洞」の發見者として知られてゐる。

氏は縣立農業學校の出身で關西高等工業學校を卒業し爾來八ヶ年間、土木建築請負業たる大阪の株式會社細野組社員として勤務してゐたが、歸縣後、古來靈泉として有名なる南木山の自然湧出泉が無慘ノ、流出に任せるを遺憾とし是を近代的设计に取入れて若宮温泉とし、一躍縣下の新名所にでつち上げた外、郷社若宮八幡宮の夢のお告にヒントを得て、四ヶ月間山中を駆け巡り遂に鐘乳洞としては其の美觀は日本一と稱する一大洞窟を發見した功績の如き、嶺北文化開發の恩人として普ねくその存在を謳はれてゐる。近時その地一帯は鐵道省指定のハイキングコースとなり、又キャン

プ村の好適地として高知縣廳、逓信、鐵道兩省の指定を受くる等、ますますその發展を見てゐる。尙氏は大正十四年工兵として善通寺聯隊に入營、現に工兵中尉に進み從七位に叙せられ、長岡郡在郷軍人會の副會長とし、目下會長の八井田茂實氏が應召の不在中、分會長代理として銃後の護りに活躍の武人肌としても知られてゐる。

## 澤村元治氏

長岡郡長岡村の産で當年四十二歳、現に同村産業組合の組合長を勤むる氏は村でも屈指の人物として、その人望も中々に多い。十六歳の時夫君を失ふた農家の子として、高等小學校以上の學歴こそなければ、其後全くの獨學で勉強した氏の實力と、尊とい體驗から生れた處世常識は、なまなか祖上の勉學に得た以上力強い成果を見せ得る。大正七年頃、例の高知商業銀行華やかなりし時、その後免支店に勤務した事もあるが、同行の没落と共に、この若き銀行家の夢は脆くも破れて、結局落つところろは祖先傳來の土に生くる途のみであつた。爾來、歟に親しんで又他を顧みず、次第に村の中堅たる地位を固め、二十六歳にして早くも村會議員に推されてゐる。現在の椅子は去る昭和七年以來衆望を負ふて就任、どこまでも地味な奮闘家として知らる。長女の千鶴子さんは土佐高女に二

女は小學校に在學中である。

## 岡村秀美氏

安政の大地震に際會して高知のお城はビクともしなかつたと云ふ。昔の所謂名人と稱された人々は、その仕事の一つ／＼に魂を打ち込んだものだ。即ち仕事イコール趣味であり、斷じて金儲けの爲の似非仕事ではなく勞働でない。近頃あらゆる經濟は建國道義の上に建設せよと言はれてゐる換言すれば打算を超越せよの意味である。西洋文明の輸入以來人は金儲けのみに仕事をする。一も算盤二も算盤のそこに粗製濫造が發生する。粗製濫造は日本精神の違反だ。今日の時代に仕事即ち趣味也の尊い理想を持つた人は尠いが、岡村秀美氏の如きは斯うした意味に於いてたしかに推賞するに足る人物である。

即ち香美郡赤岡町の郵便局長として繁劇の職にある氏は、釣もやらねば碁將棋もさゝぬ、一向に道樂と言ふものがない。たゞ休養は夜間睡眠の中のみであり、起きて居る間は一も二も仕事に没頭で、とりも直さず趣味即ち仕事、仕事即ち趣味の人である。同郡佐古村出身で、父君は縣下三等郵便局長の最古參とし三十八年間勤続の功勞者、氏は城東中學卒業後大正十五年父君の跡を受けて就

## 廣瀬伊佐吉氏

任、少壯局長として大いに敏腕を揮つてゐる、とに角にも仕事に熱心の精力潑瀾たる活動家で、かつて高知縣三等郵便局長協議會長に推された事もあり、放送局事務部長、赤岡信用組合理事として大いに將來を矚目されてゐる。夫人は元村長故川田忠夫氏の二女で縣立安藝高女出身、長男光城君は城東中學卒業、二男は未だ小學校にあり長女芳子さんは縣立第一高女在學中。

人世の行路亦峻嶮なり、七轉び八起きは又男子の本懐ならずや。「憂き事のなほ此上に積れかし、限りある身の力試さん」を如實に實行、表現した一人にわが廣瀬伊佐吉氏がある。

氏は明治十四年の暮、長岡郡三和村濱改田の魚問屋に生れ、その少年時代は比較的順調の一途を辿つたが、先代忠平氏が京阪方面に販路の擴張を企て、失敗、家運一時に没落の上へ忠平氏の逝去となり、まだ十九歳の氏の上に一家の重みはのしかゝつて來た譯である。茲に於て勇往一番、何藝と手に唾して起つた氏は、爾來六年間、馴れぬ肩に天秤棒一本を資本に香北方面に乾魚干物の行商を試みて倦む事なく活動して、多大の信用を勝ち得たが、折柄日露の開戦は氏に名譽の召集令をもたらし、多年の地盤を一朝にして放棄の止むなきに到らしめた。斯くて凱旋歸郷後の氏は再び野心満々

青雲の志を抱いて、運命の開拓と商機の把握に各地を流浪すること凡そ十數年、其間あらゆる浮世の辛酸を嘗めて圓轉滑脱の人格を養ひ、四十六歳にして其の信條にしたがふ紹介業を始め以て今日に及んで居る。八年前高知市玉水町一番地に事務所を置いたが、一昨年末、水通町一丁目に移した。

人となり豪放にして奇骨稜々、苟しくも曲つた事は爪の垢ほども嫌いと云ふが氏のもち前で、同業中でも正直者として通つて居る。養嗣子楠二郎氏は當三十五年、十三歳にして縣廳の給仕となり累進して電話課に勤務中、昭和九年の本縣未曾有の風水害災禍の折電話復舊工事に必死の努力を拂つた功績により、時の警察協會長坂間知事より表彰状を受けた程の勤勉家、夫人は濱田禮太郎氏の長女八重子さんで内助の聞へ高く、小學校に通學中の令孫二人がある。

## 西村信久氏

長岡郡岡豊村、お地蔵様で名高い笠の川の住、その温厚圓満なる人格と、輝やかしい過去の閱歴は村の元老として村民欽慕の的である。同郡瓶岩村に生る舊姓小松。縣立師範學校を卒へて、同郡豊永小學校、長岡高等、介良尋高、香美郡美良布小學校々長等を歴任し、昭和五年には委任官に叙せ

られたが六年四月教育界を退き同年十一月望まれて岡豊村長に就任村治に貢献するところあつたが満期退職後高知市立商業の書記となつて現在に及んで居る。頭腦ことに明晰で、とつて五十八歳とは見へぬ壯健な体軀に繁忙の事務をてきばきと處理する才腕は、丁野同校々長らも、「蓋し常人では到底出來難いわざ」と口を極めて激賞して居り、特に入學卒業時等の繁刺の際などなくては適はぬ存在として重きを爲して居る。

## 福留元徳氏

明治四十二年の春、當時の高知一中を巢立つた鳳雛五十三名の中、醫師として成功を見てゐるのが十一名ある。そのうち四名の愛知醫學士の筆頭を福留元徳氏とする。

明治二十一年の晩春、香美郡美良布村で産湯のたらひに時鳥を聞いて誕生、愛知醫學卒業後一年志願兵として善通寺の四十三聯隊に入隊、現在後備役陸軍々醫中尉の肩書を有すると云へば、今日國家の重大時局に際し干戈の巷に應召第一線に活躍する光榮に一步前と言ふところ、郷にあつては開業の傍ら凡そ畑疋ひの村消防組々頭の職にあること十有二年、或は村會議員として活躍するかと思へば、福登と名乗つて義太夫は玄人はだしの妙調と云ふ、又事業方面にはさきの香陽自動車會社監

査役に就任、香北の交通文化方面にも力を致す、所謂多趣多藝の才子である。夫人は太郎丸の五百藏梅吉氏の長女で淑徳の譽れ高い方、長女千鶴子さんは縣立第一高女出身の佳人で人も羨む圓滿の家庭である。

## 蒲原正氏

青柳の長橋を以て高知市と通ずる東郊五台山村の村長、明治三十三年生れと言へば年齒未だ四十に満たざる壯年氣鋭の主、村の生へ抜きで縣立農業學校を卒業後昭和六年から若き収入役として五ヶ年を村政に孜むるうち、野中前村長の逝去後全村一致の推す處となつて昨年の暮村長に就任したが、現下の同村は前々村長時代から計劃着手した水面埋立地の其後、成績とみに香ばしと言へず、只管新村長の手腕に期待さるゝところ多かつたが、氏は就任以來銳意これが打開策に努力して遂に之が最後の仕上げなる日本勸業銀行高知支店より借入れの七万五千圓の償還に全力を注ぎ、爾來着々として、その好果を收め、村民の惱みを一掃することの近き日にあり、といふ、故に氏の手腕は永く村史に赫々たるの功績を印するに到つた、由來五台山の地は難治村として定評あるところ、早くも手腕満点の折紙に謳はれる氏の前途には尙幾多の爲すべきが横たはる丈けに、その前途を囑

望される事も又大なりである。

## 穂岐山萬視氏

幡多郡宿毛から出た岩村三傑の一人、岩村通俊男爵の銅像は北海道札幌市にある。蓋し男が初代の北海道廳長官として赴任、開拓に努力したその功績に對して後人の建設したものである。元來北海道の開拓事業と土佐との縁故は頗る深いものであり、明治中葉には、武市安哉氏、阪本直寛氏等が彼の地に渡つて相當の成功を收め、近くは宮崎宣政、西原清東氏の如きも開拓事業の成功者として聞へてゐるが、わが穂岐山萬視氏の如きも亦先人の遺鉢を繼ぎ、遠大の志を抱いて、同地の鑛山開發に當つてゐた有爲の人物である。

氏は香美郡田村の生れで當年四十二歳、農業學校を卒へて間もなく同地に渡り、大いに爲すべき處あつたが、家郷の事情の爲已むなく中途にして歸郷、爾來村役場の書記となつて昭和二年には同助役、十二年六月立田、田村組合長となり現在に及んで居るが、氏の人物を知る人々のことごとくは、氏の北海道に於ける鑛山事業の中絶を衷心惜しんでゐると云ふ、夫人は久家久次氏の長女で一男三女がある。

## 井上卯太郎氏

世に「佛作つて魂入れず」と云ふ、浦戸の港は多年待望の開港場に指定されたが、これを充分に活用するところなくんば、蓋し銀魚釣りが名物のみの只の港に過ぎずと言へよう。茲に本縣特産の石灰輸出商として有名な長岡郡稻生村の井上卯太郎氏の如きはまこと、高知開港の今日意を強うするに足る存在と言へる。

氏の先代卯太郎氏は藩候山内家お出入りの一石築師だつたが夙に下田山一帯の石灰山が將來大いに有望なるべきに着眼し、先代川崎幾三郎氏に勧誘して、僅々三千圓で一帯の採掘權を占得せしめた。現在同山の價格が幾百万圓と評價されるに對して氏の着眼が全く非凡なりしを窺ひ知れよう。斯くして川崎家の厚い信任を得た先代は渾身石灰業に没頭、奮闘努力の結果、「カネ十一」の名は縣内外に隆々たるに到つたが、その逝去後は今の卯太郎氏が業を繼ぎ、令弟綱次、富喜両氏及び令息知代喜(市商出身)諸氏を幕下に網羅する堅陣を固め、一面海運業に乗出すと共に、東京王子日本化學工業株式會社を主とし更に阪神方面は素より、朝鮮、滿洲方面にまで進出し、その業績は日と共に倍々隆盛を見るに到つた。昭和八年には更にカルシウム工場を起して稻生、三里の兩村に三ヶ

## 北川喜久馬氏

所の工場を經營、百數十名の使用人を擁する一大工場を經營するに到つたが、その所有船第十八號壽寶丸其他は、有名な紅綠塗り分けの船体を東京方面から遠くは富山縣伏木港、九州延岡大牟田方面に廻航目まぐるしい飛躍を續けてゐる。今や斯業の第一人者たる氏は土佐石灰輸出同業組合長を経て理事、土佐肥料石灰工業組合理事長の要職にあり倍々斯界に貢献する所多く、その製品の如き又中外の好評を博して、明治卅六年の第五回勸業博覽會並に、明治四十三年の第三回全國特産品博覽會には共に有功金牌と、大正十一年平和記念東京大博覽會と、大正十二年四國化學工業品共進會では金牌を其他數十回の表彰を膺まゝにするの好評を博してゐる。

園藝の本場、長岡郡三里村信用組合の専務理事として組合の主と云はれる人、同村仁井田の生れで本年六十一歳の今日迄殆んどその生涯を村の發展向上の爲に捧げつくした人と言つてよい。即ち村農會を振り出しに、収入役、村長と、村の公職と云ふ公職の何れにも一度は就任せざるはない。今の信用組合は村長時代その創立に力瘡を入れて實現せしめたもの、初代の専務理事に推擧されて十五年間勤続したが辭して昭和四年に縣繭絲組合聯合會々長を同八年迄勤め、再び元の椅子に還つて現

在に及んでゐる村の大先輩であり、其の活動力の旺盛なると事に處して果斷なる手腕が人々から敬慕されてゐる。趣味は果樹の栽培で、長男清水氏(四)は海南中學出、東京商船學校卒業後、日本郵船會社に勤務、清水氏夫人は相原氏の長女で縣立第一高女出身、二男あり。次男稔君は自宅で農業に従事三男澄夫君は高岡高等商業を終へて兵庫無盡株式會社に勤務してゐられる。

## 川村泰啓氏

信用で光る高知株式界の第一人者、香美郡山南村の生れで當年六十五、郷里の家は村でも五本の指に折られる素封家であつたが、約四十年の昔、材木と米との失敗から殆んど裸一貫になつたが氏は昔の信用を土台に堺町に株式店を開業、幸にこれが當つて順調に成功し再び元の聲名を回復するに到つた。播磨屋町の交叉点が道路を擴張されるに當り今の浦戸町へ移轉し爾來堅實一方の商法で知られてゐる。養子武意(三)氏は舊姓「笹」泰啓氏の甥に當り三歳の時から養はれて肉身の親子にも見られぬ親しみである。現在の店は武意氏が殆んど一切を擔當し温厚な少壯實業家として好評がある。泰啓氏は香美郡山田町山間丸に約三町余歩の土地を所有し、これに稲作及び果樹を栽培して私設農事試験場の觀ある完全なる農園を營み、只管利益を超越した種苗、其他の改良増産に研究を進め、

同町方面に多數を擁する自己の小作人等に試験の結果を報告し共々改善に努めしめてゐる。先年宏壯なる本宅を湖江天神町に建築老後を養ふてゐるが、山田の農園通ひは殆んど毎日倦むところがない、武意氏夫人は吾川郡浦戸村山本義三郎氏の息女である。

## 宇田喜太郎氏

本縣唯一の本格的百貨店として知られる高知市堺町「丸乃デパート」……舊野村デパート改稱……の取締役兼支配人として、昨年一月の就任以來鋭意内外の改善其他に縦横の手腕を揮ひ從來兎角不振の状態にあつた同店を今日の隆盛に導いた宇田氏の功績は燦として輝くものがある。

氏は腕盛り男盛りの四十四歳、香美郡岸本町の出身で市立商業第十回の卒業生、年若うして出高高知市に文具陶器の金富合名會社を設立、大いに實業界に雄飛を志す折柄大正十年嚴父の逝去に會ふて歸郷の已むなきに至り、爾來郷にあつて各種の事業、公職に關係するところ、行く處可ならざるはなき才人ぶりを示して、宛かも町の大先輩宇田友四郎氏が全盛時代の縮圖をその儘、早くも小宇田の敬稱で呼ばれるに到つた。即ちその公職關係の一端を列べても

縣水産會副會長、高知縣商工團休聯合會幹事、岸本町々長、岸本商工會々長、赤岡稅務署管内所

得税調査員三期、家屋税第二次調査員二期

等々の要職に推され大いにその才腕を謳はれたものである氏は人となり義侠心に富み、此の種の美譽も多いが就中氏の面目を遺憾なく發揮したのは過ぐる昭和四年の漁民騷擾事件の際、これが犠牲者となつて檢舉された者五十数名の中には、忽ち一家の大黒柱を失ふて糊口にさへ困窮する家族も尠くないに見かねた宇田氏は慨然これが救済に起ち、關係者方面を説いて忽ち三千圓の見舞金を募り更に多額の私財をも投出して徹底的救助に奔走したその熱血ぶりは、未だに高幡兩郡の津々浦々に、宇田氏の名は神の如く讃仰せられてゐる語り草である。近時は亦、商工業の經濟統制研究に没頭、その方面に於けるうんちくは恐らく縣下實業界の第一人者と言はれ、十二年三月には商工省の認可に依る高知縣文具品小賣商業組合を結成、その理事長に推されてゐるが、何によらず氏の事業に着手するや、徹底的研究を惜まざるその熱心さが、今日の大成を博した所以であらう。賢婦人の聞き高き夫人新子さんは藝東甲浦衣裴寅之助氏の三女で女子師範の出身者、現に香美郡檜山青年學校の教諭である。

## 猪野博範氏

長岡郡長岡村上末松の素封家、慶應大學法律科を大正三年に卒へて當時高知鐵道株式會社に入つて監査役に就任、國見保護施行森林組合の副組合長、大杉土木森林組合理事、村教育後援會長、高知地方森林會議員、村農會長等々の經歷を持つて居り、郷黨では新知識の評判が香ばしい、趣味は圍碁。令弟宏靖氏(二四)は東京帝大獨法科三年に在學長男範隆君(二〇)は城東中學卒業、長女博子(二五)さんは、土佐高女卒業の才媛で生花、茶道、琴曲に堪能、二女重子(二四)さんは土佐高女在學中、外に一男一女がある。

## 町市郎氏

楠病院創業の一世楠正任氏の嚴父正興氏は、山内容堂公の侍醫として學、古今に篤く、一面奇骨稜々、豪腹の快男兒であつたが、香美郡山田町の齒科醫師町市郎氏の風格は、將に正興氏の薫りを傳へる人物だと評した人がある。

當年四十七歳、東京日本齒科醫學專門學校を大正四年に卒業して翌年山田町に開業、以來二十三年。その人物は早くから人々の崇敬の的となり、さきには推されて縣齒科醫師會長となり辞任後同會議長の職を占む事門則、香長支部會長の現在に及んでゐる、大にして國家、少にして吾が家百

年の大計は殖林に在り、吾れは殖林に因りて終始職業的運動不足を醫するに足る」と、氏の持山の悉くは、何れも丹青になる杉檜が青々と繁茂してこゝ幾年か後の成果は充分に期待するに足るものがある。長男久榮君は城東中學を終へて高知高等學校理科乙の三年に進み、將來仁術報國を志し、二男秀夫君は同じく城東中學卒業後父業繼承の目的で日本齒科醫專に入學、長女好子さんは土佐高女五年に在學中、夫人清子さんはつとに婦徳の名あり一家圓滿、町民美望の的となてゐる。

## 川島猪之助氏

民政黨高知支部の長老として、縣政界の重鎮たる川島氏は、つとに現役を卻いて、長岡郡三里村仁井田の堂々たる邸宅にこもり悠々自適の晩年を過して居るが、未だ縣政界に於ける氏の勢力は依然として衰へるなき確固不拔の存在である。それだけに氏の過去には隨分華やかな話も多いが、明治三十一年初めて縣會議員に當選、同時に副議長に推されたる如きこの一事を以てもおよそ萬般氏の人物の程が窺はれる次第である。

明治二年の生れと言ふから、當年七十歳、土地では神の如く崇仰されてゐる温厚の君子人で、居村信用組合長を創立以來押しつけられてゐるが、一文の手當も取つてゐない等は有名な話である。

土佐高等女學校の理事、土佐中學の顧問、高知新聞社の重役、こんな肩書を既往に遡つて並べて居ては際しがあるまい。海南中學の出身で東京の第一高等學校に學び、政界に入つては中央の名士等と交遊多く、辯護士川島祐雄氏の嚴父である事も人の知る通りである。和歌と漢詩をよくして基も強い。先年居村吹井の武市瑞山先生の墓所が、荒廢寂寥なるを慨いてその改修と參道の擴張をなし後瑞山神社の實現を見るに到らしめた功績の如きは床しさの限である。

## 鍋島運猪氏

介良の鍋島運猪氏といへば雷の如く聞こへてゐるがその性格、閱歴を先づ表彰狀をして語らしめやう、即ち

君ハ性剛直ニシテ世俗ノ毀譽褒貶ヲ以テ意トセズ一意専心村利民福ニ委ネ郡會議員タルコト三年、村長タルコト二年四ヶ月、助役タルコト一年七ヶ月、村會議員タルコト二十一年公職勤績實ニ二十有八年一ヶ月此ノ間郡農會議員、學務委員、水利組合會議員等ヲ兼任シ自治ノ爲盡シタル功勞顯著ナリ 仍而介良村有功者表彰規程ニ依リ茲ニ其ノ功勞ヲ表彰ス

昭和八年五月十九日

村長

横山 里次



而して氏は高知巡航の取締、三和自動車會社専務、高南自動車の取締として交通事業に携はり介良村の信用組合長として功あり。同村岩屋の出身で縣立一中卒、三高に學んだが病氣で中途退學して地方開發の生涯に入つたのである。霸氣旺盛の活動家だ。公共事業中特筆すべきは俊秀、信太内務部長時代(鍋島氏が郡議當時)大篠村明見と協定のヶ池を介良三千石の灌漑水源地として生かしたことである。趣味は投網と謡曲(喜多)。夫人は西田良氏の令妹で、長男明光(三)氏は農林學校出で長岡高等小學で教鞭をとりしも本年退職、柔道三段、その夫人は大篠村明見松村義正氏の長女、縣立女學校出で、三女あり。また運猪氏の長女貞子さんは土佐女學校優等卒業生で阪本節氏に嫁し二女は岩村、山崎卓郎氏へ、三女糸重さんは土佐女學校優等卒業生で城西病院藥局長西田利正氏へ四女綾女さん(三)は縣立第二高女を優秀で卒業、池ノ坊の生花、茶に堪能、二男徳一氏は市内田淵の伯母(父運猪氏實姉の)の家なる山崎家に入り現在吾川郡伊野町小學校に教鞭を取り夫人は夜須の上田三九郎氏の息女で縣立第一女學校出の秀才である。

## 菅 庸 晃 氏

宇宙は活氣である。政治には政治の機が、商賣には商賣の機がある、この機を捉へこの機に乗つて

行くのが成功だ。なまじなな學問をした人の頭へはこの機が入り難い。學問の人は何事も理論的の算段をする、其際に機は通り過ぎてゆく、岩崎と言ひ大倉といひ博士でも學士でもない。大倉喜八郎は天秤棒を擔いだ魚賣りだつた、豊川良平と言ふ人は手紙さへ錄には書けなかつたと言ふ。其頃と現代とは時勢が違ふと言ふ勿れ、成功と學問とは必しも相比例しない。土佐の清岡榮之助氏の如きは小學校へも満足に行かれなかつた頭だけれど天地の活氣は潑瀾と動き製鋼主として一代の成功を誇る。

明治二十二年神戸市に生れた菅庸晃氏も小學を出たのみで左官の請負業だつた父業を輔けてゐる、其後木材業に志して紀州新宮で木材商へ轉じ、兵役を済ましてからは土木請負もやつた。其高知市へ來たのは約二十年前、下知北の丸で菅製材所を經營し漸次發展して日本樽材株式會社を引受け現在に及んでゐる、廿代の入交太藏氏とは菅氏が先代の頃よりの取引で、氏が發展の地歩を土佐に求めたのもそうした關係が動機となつてゐる。天地の活氣は常に轉動して一点に固着せず、學問をした頭は一点に固着し安い、彼等が成功の貧弱なるは其處にある、其意味から成功の菅氏に敬意を拂はざるを得ない、今日氏の傘下にある葛嶋製材所は内地の製鐵所、麥酒會社、朝鮮及台灣總督府、内地の各煙草專賣局へ製品を納入し一ヶ年の生産額百二十萬圓、工場二十棟、従業員は山方の人夫を合して約千人の盛大を極めてゐる、その代表社員たる菅氏の人物亦偉なる哉、性格剛腹果斷の奮

開家、住所は高知市知寄町三丁目にある。

## 得能通貞氏

高岡郡吾桑村出身、前縣會議員で、現に同村長の職にある得能通清氏の令弟で當年四十二歳。熊本醫科専門學校を卒へて夫人の嚴父である大谷定氏の經營する安藝郡安藝町大谷醫院に奉職してゐる。岳父定氏に似て偉軀堂々、温厚にして如才なき交際家、夫人との間に二女、一男あり、更に將來を囑望されてゐる。

## 森本清龍氏

香美郡檜山村々長にして香北地方きつての元老、維新の風雲いまだ納まらぬ明治元年生れで當年七十一歳、同村生へ拔きの人物で少年時代同地の碩學岡村肇翁に就いて勉學す。明治二十年頃早くも頭角を現はして戸長役場筆生を振出しに裁判所登記所の雇を拜命大いに驥足を延ばさんとしたが氏は深く着目するところあつて官界を去り、美濃紙の産地として名ある檜山附近の製紙事業興隆を

志して製紙業を始めたが、事、志と異ふや再び村役場に入り、書記、助役、村長に就任、一時赤岡銀行に勤務したが、昭和十年再び村長に推され産業組合を起してその組合長をも兼ねてゐる。氏は世を譲る子實に恵まれない爲、その一生を公共事業に専念、私財を惜しまず盡力するところが多い。

## 松井董作氏

長岡郡後免町に堂々たる香長病院の院長醫學博士、廣島縣尾之道市十四日町の出身で、大正十一年京都府立醫學専門學校の卒業生、頭腦殊に明晰で、語學に長じ特に英、獨語に堪能とある。趣味は俳句と古錢の蒐集で、そのコレクション中には同好者の垂涎をかざる珍品が多い。

## 岡田重直氏

南學の土佐に南學熱が擡頭し、南學會の設立などを見るに至つたのは最近の事である、その由て起るところに北村澤吉氏が卓然と存在する氏は廣嶋文理大學教授の文學博士である。南學者としての博士は谷時中先生門下の山崎闇齋、小倉三省の如き立場にあれば一方に野中兼山の如き實務家が

あらねばならぬ。わが岡田重直氏は將に昭和の兼山である。氏は明治四年十一月香美郡立田木村の生れ、縣立第一中學を経て同窓同郷の人北村澤吉氏と手を携さへて上京、研學の途にいそしんだが實に此時から兩者の意氣投合肝膽相照らすに到り、北村氏は南學の闇齋、三省として芽生へ、岡田氏は同じく兼山として芽生へるに至つた。然るに岡田氏は嚴父の逝去に會ふて惜しくも學半ばにして歸郷の已むなきに到つたが志は依然變ることなく、若冠にして早くも居村の改善に着目、或は自由、國民兩黨の統一、等を企て幾多棘の道を押し切つて飽くまで厚生、公益の一途に邁進した結果氏の今日迄に遺して來た足跡は頗る大なるものがあるがその一半を窺ふと立田、田村組合役場創設に努力、後に村長に押され大正元年には郡特設電話開通を計劃して奔走、同三年に是を成就、同二年には村郵便局設置の必要を痛感、それ〴〵要路への交渉、運動は殆んど單獨にて倦まず遂に開設を見て其局長に就任する等苟くも公益公共の事には常に率先粉骨を惜まず、又た物部川第一期水害防備施設に献心的努力を傾けて是の實現を見るや次は縣水力電氣變壓所新設を隣村岩村と奪ひ合ふて遂に成功を收め、小學兒童の登校路開設には所有の土地を眞つ先に寄附して隣人の蒙を啓き、その功績に對し清水所長より一部街路に電燈の寄附を受け、或は物部川水利堰問題に盡力、産業組合の創設に奔走する等々々々そうした実績の數々は枚擧するに殆んど暇がない程である。

なほ村會議員から各種組合議員、高知地方裁判所小作人調停委員、信用組合長などの公職につきも

亦多く、所謂今日昭和の兼山先生と郷黨の欽慕を一身にあつむる亦宜なりと言ふべしであらう。夫人は同郡山田町西尾氏の女、長男重和氏(三六)は城東中學卒業選信官吏傳習所を経て熊本選信局に奉職、二男重成氏(三五)は海南中學出身父君の許にあり趣味は魚釣りと狩獵、先代重規氏までは世々庄屋の家柄である。

## 高野源吉氏

近次彗星の如く急激に隆盛となつた高野源吉金物商店の土佐鍛工界に於ける飛躍に眼を見張らぬ者はない。香美郡大楠植村は土佐名代の打刃物の産地であるが源吉氏は最初は父君岡田權十郎氏の經營せし雜貨鐵材商に在り、鐵材販賣上この村の各鍛工場を見てゐるうちに十七歳の時、これらの所謂土佐刃物が元來土佐の特産品で品質最優良縣外發展の可能が十分であることに着目した炯眼は實に驚くべきものである。そこで早速九州方面へ視察と販路擴張に出張して歸り直ちに大正十一年土佐刃物製造販賣を開始したものだ。事業は思つた通り栄ち、昭和八年には店を洋館に新築し、昭和九年合名會社高野源吉金物商店とし今や土佐鍛工の代表的製造家として押しも押されぬ大會社となつた。同業では縣下の最古であり第一流、しかも社長の高野源吉氏は當年取つて三十四歳。學歴

は鏡野高等小學校卒業のみといふから二重三重の驚異でないか。その商才推してしるべく、ひとり鍛工界といはず縣下産業界を通じての麒麟兒といつて斷じて過言ではあるまい。その業態を一瞥して特に感ぜられることは、その製品が全部直營の鍛工場で製造され縣内外、殊に縣外への通信販賣に殆ど主力を注いでゐることである。従つて氣の利いたカタログ、カタログ内の宣傳ぶりは正に土佐一と斷言して憚らぬ。只の宣傳ではない、その一つ／＼に自信に満ちた發表は質と値の無敵に百パーセントの自信があるからと肯かれる。就中薄刃物は同地が絶對に他の追隨を許さず鎌では日本一といはれるだけに販賣もこれに主力を注いでゐる。とはいへ厚刃物もまた斷然天下に名聲を博してゐて、彼のダルマ印、ヤマタ印の鎌及び庖丁其他各種の品はこの産、取引先は全國一圓で外に滿洲國（採木公司用達）、鮮、台、北海道、樺太にも及ぶが通信販賣の外今一つの勉強として各地に六、七回の社員出張をなし又、春秋には全國需要地へ優良職工を派してサアヴィスに努め感激され、縣下は自家用自動車で急送してゐる。（本店は大橋植村字植部にあり支店を熊本縣人吉町に置いてある）源吉氏の趣味は自家用ダットサンにてドライブ、又娛樂として網打、狩獵等、夫人は高知市中須賀中山豊太郎氏の二女で一男二女あり、嚴父岡田權十郎氏、現存令弟齊氏（五）は城東商業を中途退學して家事に従ひ、その夫人は赤岡町精米業山本氏の二女である。源吉氏は現在村議の要職にあり部落には警鐘を寄附したりして少壯早くも大きい人望を背負ふてゐる。因に工業上の榮譽を掲げ

ると大正十二年八月拓殖勸業夏の夜博覽會で木廻鶴及斧特選賞金牌▲大正十四年十一月中央金物新報社主催全國金物共進會一等賞▲同上委員として同社の感謝状を受く▲昭和十二年七月土讚線開通記念南國博覽會記念狀▲同年九月七日國防資材献納にて陸軍大臣より感謝状を受く。

## 芋坂岩吉氏

（通姓は尾坂）本縣に於ける最大の古鐵商として夙に名を馳せてゐる高知市常盤町三條通芋坂岩吉氏は明三十年一月十日生れ、下知尋常高等小學を卒業した俊物である。梅檀は双葉より芳ばしの例への如く小學時代から敏捷、俠愛の風あり、長ずるに及んで益々才幹の質を發揮し鍛練修養愈々大器量人たるの磨きかけられたのである。

父君は芋坂實次氏。岩吉氏は幼少の頃母方の高畑姓だったが十八歳の時から芋坂姓となつた。そして父君がさゝやがな古鐵商をしてゐたのを受け繼いで忽ちの間に飛躍又飛躍、今日の大を成すに至つた但し仔細に檢すれば一日幾多の波瀾あり、時に巨萬の損失を受けた時もあったが、氏は少しもひるまず、七轉八起の覺悟で太い一線を描いてのし切つて來たのである。どこまでも強い信念の下にたゞ一直線邁進して來た。氏は常にいふ「今迄はほんの序の口だ、事業はこれから」と、その膽の

大きい所、一寸高知縣下の商人に類が無く大阪實業家の風格を備へ、凡ならぬ巨商の俤があり一代の大成功期して待つべきものがある。

彼の昨晩秋、薄鐵工業株式會社設立の際立の如きは、尾坂商店の前進、兼ねて軍需報國の途は此の外に無しと、決然金庫の奥深く遺書を納めて決死の覺悟で上神、神戸薄鐵興業株式會社の重役と折衝し首尾よく成功したもので歸來するやその後約十日、金庫中から遺書を取り出して莞爾として破棄したエピソードを持つてゐる。今や堂々六百八十坪の工場、二十六名の従業員を置いて嶄新な機械により一日二千貫（本年末迄に一日四千貫の設備に擴張の筈）のプレスを製造し外に一日四千貫の古鐵類を賣買せる高知薄鐵工業（神戸薄鐵工業の姉妹會社）寸暇も無き取締役として活動し縣下に氣を吐くに至つたのも宜なる哉だ。

尾坂氏（ほんとの芋坂の芋が一般に讀みにくいので尾の字を使つてゐる）は敬神崇祖の權化みに熱烈な信仰をもち仕事の外に何の趣味も無い。何でも徹底的な性格で、平常は酒を呑まないが賓客を迎へたり社交の際は徹夜でも痛飲して平氣である。趣味は無いと前に述べたが強ひて趣味ともいふべきは外出や旅行した時は修養になる書籍を買ひ求めて來ることである。裝飾用の書籍は一本も無くみな讀破玩味する本である。従業員に對する温情はまた格別で恩威並行、店員社員はみな指を動かす如くである。俠氣は社外へも溢れ、哀れな人々を救済し、或は町内の世話等美事善行は

枚舉に逞が無い。

兼猪夫人との間に保衛（市商五年）、好喜（城商二年）徳美、賢一（いづれも昭和小學）の四男子がある。

## 廣松熊太郎氏

孟母三遷の教といつて昔から著名である。工石、黒森、梶ヶ森などの高山に麗々と咲く石楠花を黄塵萬丈の街に咲かさうとするのは容易でない。咲くにしたところで高山の雰圍氣に燎亂の春を嘲るやうな清麗を現すことは難い。椿の花などは室外でも室内でも變色しないが、敷島の大和心を人間はば、朝日に匂ふ山櫻花、櫻を室内に咲かせば色が變ずる。武市瑞山は獄舎の裡に咲ける櫻の花は青白いと筆して、家族に送つてゐる。拔山蓋世の英雄もセントヘレナの孤島に沈吟する日は駄馬にも劣る。燕雀は地を飛び、鶴九泉に鳴く。愚者は何處へ行つても愚者である。朝日に匂ふ山櫻の大和魂は天空海潤の雰圍氣に伸びくと彩る。人間の發展は環境にある。

東に福留彌通、西に黒田總松、中央に廣松熊太郎と謳歌された土佐水産三傑のうち黒田氏は他界の人となり、最古参として存在せるのは廣松氏のみとなつた。氏は安藝郡安田町に生る（七三）。雛鵬既に

天に冲するの意氣あり。故郷安田は俊物の一生を托するところでない。氏が裸一貫、父與之助氏に伴はれて、現在の浦戸村に來たのは十七歳の時である。二十七歳まで帆船々員として多少の貯金をし、雜貨と漁業を始めたが、漸々發展して今日に至る。明治二十七年高知縣漁業組合の起るや、縣下十二ヶ小區選出議員に當選。更に水産組會議員となり、水産會に變更以來連續的議員に當選。郡水産會創立發起人となり、初代會長就任。以後副會長に就任したるも、昭和九年中風症の爲辭職。かつて吾川郡漁業組合聯合會を起し、會長となり、表彰を受けた。また明治三十六年浦戸漁業組合を創設、組會長となり、以後三十年間理事の職にあり。縣水産會議員再度當選。水産功勞者として表彰され、金側懷中時計を受けてゐる。座談に長じ、竹を割つたような性格の持主である。養子秀策氏は元安藝郡中山村長南善策氏の息、浦戸村役場書記收入役を経て助役三期。趣味は圍碁、謠曲。

## 入交盛嗣氏

長岡郡新改村新改に代々醫を業とする第五代目の當主、昔から近郷に聞へた名門である。氏は青春の頃一度實業方面を志したが、家門に忠なる慈母の訓すところあり、功名も榮達も擲つて先祖代々の業を繼ぐべく決意遠く東都に遊學する事多年、天晴資格を得て明治四十四年以來診察に従事して

今日に到る。謹嚴のうちに親しみ深い人格者、至誠博愛のこゝろが人々の敬慕をあつめてゐる。長岡郡醫師會の理事であり、高知縣醫師會議員に推され、又村の元老として知られてゐる。

## 有澤官一氏

明治十一年一月香美郡岩村に生れたが六歳の時母方を繼いで同郡田村に移り住み今日に及ぶ。小學校卒業後居村の積學佐竹右虎氏に就いて國學を、同じく北村氏によつて漢學を學び、二十歳の頃迄全くの獨學で大いに智識を涵養した。爾來或は小學校に教鞭を取り、田村村役場の書記、收入役を勤めたが、明治三十八年文官普通試験をうけて志願者六百名中の高位で合格、同年高知縣屬を拜命以來、ざつと次の様な官公職を歴任したが、氏の事務的才腕が如何に卓越せるかは何よりも雄辯にその經歷が語つて居る。即ち、

郡書記、縣立第一中學校書記、縣屬、大正七年立田田村組會議員、同八年香美郡會議員、同參事會員、郡所得稅調查員、丸龜稅務監督局管内赤岡稅務署管轄相續稅審查員、及所得稅調查委員、昭和二年田村農會長に再選、郡農會議員二期、同四年三度相續稅調查委員に、九年立田田村信用組會長、村會議員、等々

氏が郡會議員在職中特筆すべき挿話として傳へられるは大正十二年二月郡道改修案を同志森本清龍、山本愛吉、久保盛男氏等と提案、猛運動を續けて漸く採擇され、六萬圓の豫算迄分捕つて關係村民間に凱歌をあげ、氏等は宛も神様の如くもてはやされる折柄、突如郡制廢止で青天の霹靂は十年の說法屁一つ折角の大功名を水泡に歸せしめた事で、此時には流石の氏も張り切つた力一時に抜け、あげ鉢巻で幾日も寝込んだと云ふ話がある。

温厚謹直の士で珍らしく酒煙草を嗜みならず、趣味は書畫鑑賞、讀書、釣魚等である。長男一郎氏(三六)は城東中學卒業後大阪逓信局工務課に勤務、二男七郎氏(三七)は縣立工業を出て北畠家を継ぎ、名古屋逓信局に勤め、三男泉氏(三九)は高知農業學校教員養成所を卒へ吾川郡名野川小學校に奉職、長女信子さん(三三)は土佐高女出早く他家に嫁してゐる。

## 多田健二郎氏

安藝郡室戸岬町椎名に宏壯なる邸宅人呼んで「銅御殿」と稱するは、定置漁業の大成功者として縣實業界に覇者たり又民政黨高知支部の重鎮として縣會議長をも勤めた先代耕太郎氏の館。氏はその二男に生る。昭和七年東京帝大法科を卒へて歸郷、恰も當時破綻に瀕せる安藝町の株式會社並村製

絲場に、家兄敏男氏の保証による會社關係で入社、起死回生の大經綸を行はんとするも、瀕死の會社は輕々にして起すべきに非ず、其間健二郎氏は所謂實社會の第一步に早くも苦難の試練を嘗めたが不撓不屈の勇猛心を揮つて飽くまで邁進する氏はまづ工場改革、新機械の購入等に成功し、漸く整理の第一歩を踏み出さんとする際、何ぞ天この若き奮闘家に無情なる、市場不況と絲價の暴落に禍ひされて昭和九年四月一とまづ其整理を打ち切るの已むなきに到つたが、二百數十名の従業員を救済の爲、健二郎氏は遂に右を自己獨力の經營におさめ、刻々辛苦を續けて漸く一時の窮況を切抜けた處、前會社當時の債務にたゞられて一ヶ年後には愈々破産の危機に直面、四百數十名の債權者を回ふに廻して孤軍奮闘する氏の活動振りは眞に涙ぐましいものがあつた。かくして努力漸くに酬はれ破産取消の申請となり、現在整理委員として有澤嘉久馬氏と共に矢表に立つて交渉中であるが第一歩にして斯る難關に逢着した氏は未だ春秋に富む今後の活躍上蓋し尊とい經驗となつて將來の事業經營に無形の收獲をもたらしたもので、傍ら長兄の漁業を輔けてゐたが、昨年末には高知新聞社の從事記者となつて親しく江南の戦線を知部隊と共に馳驅、尊い血の通信に従ひ、十二月五日歸縣後安藝町の新居にあつて引續き會社の整理に熱中してゐる。家庭は吾川郡弘岡上ノ村見元福治氏の愛娘との間に一男、…五歳…あり。

## 成岡楠彌氏

高知市潮江の舊家成岡家の二男坊に生る。長子に早世された父母はなまじな楠彌氏に勉學をさせた爲め、家を離れられるを憂へて教育は小學校のみに止む、そんな譯で楠彌氏にはこれと云ふ學歴こそなければ爾後あらゆる書籍を讀破し全くの獨學にて智識を大いに廣む、二十歳の頃潮江村役場に勤め又土佐商船會社に入つたが病氣の爲退職、爾來村治に公共の事に盡瘁して倦む事なく、高知市南部方面の有力者とし又民政黨高知支部の重鎮として功成り名遂げた形、その潮江信用組合長を最後に亦出でず。趣味の謡曲や、書畫の鑑賞を娛しむ。長男與三郎(三三)氏は農業學校出で自宅にあり農事に従ひ、二男榮兵衛(三二)氏は城北中學を卒へて、脚氣を病み、今養生的に山林耕作に暮らす、三男正久(三三)氏は城北中學卒業關西學院に學び後親戚にあたる國澤家を繼ぐ、四男保昌(三三)氏は城北中學、高知高校を経て帝大法科に在學中。

## 福留彌通氏

クレオパトラの鼻がもう一センチも低かつたら、世界歴史はぐんと變つて居た筈と云ふ。一杯十

五錢のコーヒーが高いと言ふ勿れ、そのコーヒーの暴落の爲、わが福留彌通氏は南米のコーヒー王たらず、たゞに縣水産界の長老たる名のみ不甘する晩年である。氏は安藝郡西分村長谷寄の人、日本大學の前身たる日本法律學校を終つて、内務省警保局其他に奉職中將來のコーヒー王を夢みて志を遠く南米ブラジルに立て、將た彼の地に渡航せんとした折柄、外電は、同地産コーヒーの暴落を告げるを見て、俄かに志を引込めたと云ふ即ち話である。

後佐賀縣廳や、當時の鐵道院米子出張所に奉職してその敏腕を揮ひしも更に他の地方に轉じ、遂に官界を退いて、時の佐賀縣知事香川輝氏の後援を受けて、鑛山の經營に手を染めた事もあるが、明治四十二年歸郷して水産界に入り忽ち地元漁業組合の組合長、水産組合議員、高知縣水産會議員、郡水産會長を二期、郡會議員などに擧げられ、水産功勞者として縣水産會より表彰される等、斷じて常鱗凡介の徒に非る眞價を示してゐるが、老來ますます元氣横溢は、その青年時代から鍛練した柔劍道の賜であらう。

家庭は長男を失ひ、二男は高知工業出身、長崎の三菱工業會社技師に奉職柔道三段の猛者として知られ、三男は高松高商から大阪商科大學に進んで、三菱工業會社彦島造船所に勤務この方は劍道四段の達人で、これでは親父殿の分を二人して仲善う分けあつてゐる。



## 杉本邦利氏

安藝郡の名邑安藝町長として軍事援護會安藝町支部長を兼ね、就任日尙淺きにも不拘近代の名町長として町民の推服を多く、安藝町生へ抜きの人で舊姓は加田、學歷は高等小學校卒業のみ、徴兵検査を終つて上阪、其間大阪市北區芝田町に木炭商を開業する等約十六年間に彼地に送つて、大正七年郷里杉本家の婿養子として迎へられ、家業たる海産物商の外に木炭をも商ふ、一方町會議員として町政に貢献する四期、信用組合理事、安藝稅務署管内所得稅調查員等を勤め先年全郡一致の推薦を受けて縣會議員に當選したことあり事業の方でも同業者中頭角を抜いて現に高知縣本炭同業組合の副會長、同じく安藝郡同業組合會長の要職にあり、現在町長の椅子は昭和十二年八月二十三日前小松町長の跡をうけて就任、圓滿の外必家として行く處人に好感を以て迎へらる、趣味は圍碁と五十六歳の今日まだ元氣一杯のハイキングと云ふ。

## 白岩秀夫氏

一宮の志那禰様として有名な國內第一の大社、國幣中社土佐神社の宮司、この神官と云ふのにもピンからキリまであり名もない無格社に高天原を祓ふも神官なら上は神宮の宮司に到るまで、何れも一と口に神官と云ふが、其資格は社格によつてそれ／＼高下あり、決して一と口に論すべきでない。白岩氏は岡山縣英田郡讚甘村の代々郷士の家に生れ村の鎮守様の神職を振り出しに、昭和二年には神戸市の大楠公を祀る別格官幣社湊川神社の神職たり、同十一年一月末、土佐神社宮司に補せられた人で、昭和九年には奏任官待遇を受けてゐる。着任早々樓門の修覆と、神殿の改築に寢食を忘れて献身的努力を続け、今日社殿の面目一新を見たるは氏の大なる功績である。温厚にして貴公子然たる風格の中に年壯氣銳の相を具し、縣神職尋常試驗委員、及び神社々司社掌、試驗委員、皇典講究分所高階檢定委員、縣神職會總務等の職にあり、嗣子直樹氏(三子)は東京國學院大學を出て神戸市の官幣中社生田神社の主典を勤め、二男は神宮皇學館官立専門學校に三男は城東中學に在學中、長女は兵庫縣廳の沖俊平氏夫人たり。

## 板原重義氏

同じ産業組合の組織であつても市街地の信用組合の業務は主に金錢の貸付預金を司り、農村の利

用購買販賣組合等とは其性質も異にし持味も區別さるべきで、市街地のものは庶民金融機關として銀行類似の業務を営むだけにその經營はより至難とされてゐる。

高陵高岡の町は高東の名邑、附近平野の中心にあつて商工業旺盛近時ます、發展の一路を辿つてゐる。この金融を司る信用組合が相當重要な役割を占めてゐる事は言ふ迄もないが、その専務理事として敏腕を謳はれる板原重義氏こそ蓋し適材適所組合の爲、否同町の爲眞に慶賀すべきである。氏は明治四十三年縣立高知師範を巢立ち、小學校に奉職する十有七年、縣初等教育界に貢獻するところ多かつたが、退職後昭和八年三月信用組合に入り爾來六年、組合發展の爲盡瘁するところ多く關係方面から絶大の信頼を拂はれてゐる。

夫人は吾川郡諸木村の元村長宮内氏の令妹で、長男は夭くして逝き二男俊郎君は城東中學に在學、長女は縣立第二高女卒業後同郡波介村の西原氏に嫁してゐる。

## 宮崎正五郎氏

揚桃に名高い長岡郡十市の地は由來果樹栽培を以て知られてゐたが、近來園藝物、とくにその促成栽培の擽頭著しきものあり、所謂十市茄子の産地として文字通り果物のお株を奪ふに到る、同地

今日の聲名は、同村坪地園藝組合の創立者として大正十二年以來それを主宰し來れる宮崎氏の功績に負ふところが多い。氏は同村古曾に明治十七年の誕生、代々農を業にする家をついで、専心土に親しんで來たが、土地の風土が促成栽培に適せるを信じて卒先これが栽培を企て、途中幾多の難關失敗にもたゆまず、研究努力の結果遂に園藝十市の名を檀にするの大成功を収めた先覺者、現在同村一ヶ年産額でも八萬圓を超へ、内五萬圓は七十の組合員で栽培するの豪華ぶりを見せてゐる、八方圓滿の人格と、事に當つて不撓不屈の努力を惜まざる性格が獨り組合員のみならず全村欽仰の中心となり、この二月には同村信用組合の専務理事にも推薦されて、村發展の爲大いに盡してゐる。夫人は森尾竹馬氏の三女で、淑徳の名あり長男獎(モ)君は父業を輔け、長女深雪(ヒ)さんは縣立第一高女を昨年卒業して花嫁御修業に忙がしい。

## 大久保廣元氏

由來難治村として聞へる長岡郡長岡村に村長たり、就任以前より村に堆積せる幾多難問題も氏にして一度村長の職に就くや、快刀亂麻、明敏の頭腦と決斷に富む才腕の前に逐次解決されて今や同村はかつて見ざる明期にあり村民の拍手を浴びてゐる、氏は同村陣山の生れで當年四十九歳の腕盛

り、家は代々舊藩士の組頭として知られる舊家、長岡高等小學校を卒業後、農業に勵んだが氏の人と爲りは夙に郷黨の認むるところとなつて早くも村會議員に推され、前山田堰土功組會議員、縣繭糸販賣組合聯合會幹事、野田村外十九ヶ町村組合病院議員、或は長岡村繭販賣組合長、長岡郡信用組合理事、村農會長等々を勤めるところあり、昭和十二年六月村長に就任、同時に信用組合の専務理事を兼ねてゐる。書畫、骨董、刀劍等を愛してその鑑識眼も素人の域に非ず、又その信條として男兒は高等小學校以上の學問をさせず、すべて鋤鎌を握つて土に親しますの主義、それでゐて各人とも立派に人としての成功を示してゐる。長男助馬氏は目下今次事變に應召出征中、二男功氏は家にあつて農業に従事、三男四男は小學校へ、長女廣子さんは佐岡村の吉村氏に、二女敏子さんは高須村松村氏に嫁してゐる。

## 永國龜齡氏

(本誌上梓に先だち四月逝去されて今は亡し)

お國名物のヨサコイ節が唄ふ月の名所の桂濱は、一世の文豪故大町桂月氏雅號の地として今や天下の名勝として知らるゝがこの自然の勝地へ、近く南國博覽會を契機に俄然復活した人工の遊覽施

設として壽龍一點晴を添へ、錦上更に花を加へた桂濱水族館の創始者こそ、過ぐる四月、未だ大いに爲すある五十三歳の生涯を閉ぢた永國龜齡比その人であつた。

氏は浦戸村桂濱に波の音を搖籃の子守唄として成長、當時の縣立第四中學を卒へて官界に入り、徳島專賣支局三里出張所長、朝鮮總督府警察官等を奉職したが大正五年職を辭して歸郷後、漁業方面に乗り出す傍ら、園藝の縣外移出を試み、その海の仕事には鮎延繩、機船底曳網と行くところ皆相當の成果を見たが、陸の方では余り香んばしくなかつた。其頃氏は上阪のついで堺大濱の水族館を見て大いに感ずるところあり、土佐に一大水族館を設けて水産智識の普及に資せんとし、同志、鍋島、阪本、栗山、須知某等と相謀つて敷地を名勝桂濱に卜し、比較的内容の充實せる水族館を設置したが、不幸昭和九年の大暴風雨に殆んど致命的の被害を蒙つて閉館の已むなきに到つたけれど、氏の頭には是が復活の念願去らず、恰かも昨年高知市に開かれたる南國土佐大博覽會を機會に今回は獨力にて工費其他に壹萬數千圓を投ずる大規模のものを開館、南海土佐の一名物として大方の稱讚を博するに到つたものである。

一面氏は村會議員、漁業組合理事、水難救護所長等に推され、村の公共事業に盡瘁することも多く、その明晰なる頭腦と、人に好感を抱かしめる座談の巧みなど、大いに才人振りを發揮したが、今や其人亡し。噫。

未亡人は醫師石本氏の長女、長男寛氏は城東中學卒業後東京無線電信學校に學んで、現に神戸内外汽船の遠洋航海船に乗組み、船舶無電局長として知られ、三男幸夫氏は父業を繼ぎ、四男壽氏は早大に五男芳男、六男昌兩君は共に城東中學に、七男康久君は小學校にそれ〴〵在學中。一家の榮へは數萬の遺産と共に大いに光り、村民又氏の功績を稱ふるや大なり、以て瞑すべきと言ふべしである。

## 町田喜四郎氏

昔會津百萬石上杉の家老直江山城守は陪臣ながらに卅萬石に封ぜられて群少大名を歴し、石田治部少輔三成が臣島左近、伊達の片倉、黒田の栗山等、何れも將に將たるの器だつたと云ふ。高知市に於ける青年實業家の巨頭たる臼井鹿太郎氏の明敏なる濫りに人を信ぜざる氏をして無限の信賴を拂はしめ、同商事會社の常務取締役とし、四國日産自動車の取締役として事實上大白井の大黒柱たる町田喜四郎氏は將に上杉の直江、佐和山城の島である。氏は明治二十四年生れ、十五歳の時、當時大阪市に屈指の木材商たる川崎善助氏方に丁稚奉公を爲し、次いで廿代町の入交商店に入つて精勵早くも頭角を現はして廿六歳の春には獨立石炭業を営んだが、その頃土佐事業界の大先輩たりし藤村米太郎氏に愛されてその後援の下に回漕業を兼ね大いに飛躍せんとした折柄世界的不況の嵐に見舞は

れて雄圖空しく、氏は潔よく一切を擲つて元の裸一貫より出直しを期し暫くは草廬に埋れたが、人を見るに敏なる臼井氏の慧眼はぞつこん町田氏の人物に惚れこんで起用その後援によつて再び石炭商を經營、すでに伯樂を得た名馬の天驅けるが如く爾來氏はあたかも旭日昇天の概を示して業績日々に隆昌、更に臼井氏の礦油部に入つて倍々その才幹をかはれ臼井氏のみよき相談相手とさるゝに到つた次第である。氏は安藝郡羽根村の舊家の出で、人物を一言に言へば目から鼻へ抜ける才人にして而も重厚味に富み、商機を見るに敏なるはまさに典型的事業家と云へやう。現在商工會議所議員に推される。趣味は園藝と釣魚。

## 山崎龜太郎氏

古來有名な釣の國土佐に今を距る百七十年の昔安永二年の創業以來氏で第九代目の釣道具店としては最古の店である。高知市東種崎町の店舗に自ら竿を繞める奮闘ぶりも、少年の頃から丁稚奉公に叩き上げた氏として働かざる者は食ふべからずの信條にごこ迄も忠實のあらはれである。温厚圓満世話好きの性質で大の敬神家現に縣社八幡宮の専務總代を勤める等その敬虔な人と爲りを見せてゐるが一方中々の演藝通で、そんな關係から株式會社堀詰座の相談役、或は縣出品協評議員等も

勤めてゐる。長男金次郎氏は十代目の業を繼ぐべく自宅に働き、二男善久氏は元市會議員山本竹吾氏の養嗣子として土佐商船本社に勤務、三男源吉氏は市商出身で今東京の大正海上火災保險會社に在勤、四男英祐(三)氏は同じく市商を出て高島屋に在勤中現下の事變に應召出征中、長女と二女は他家に嫁し、三女は昨年逝き四女は土佐高女五年に在學中の子寶持ち、家運はいよゝゝ隆昌の一途にある。

## 岡林直枝氏

俊主と號し、灸術とくに耳鼻専門の名灸は一家相傳として有名であり、その市内江ノ口伏石の施術所には遠く縣外から訪れる人も多い。氏は長岡郡長岡村の出身で陸軍下士官として在隊した事もあり除隊後一時警察界にも入つたが、其後家傳の名灸にて普ねく天下の病者を救済すべく志し、又鍼術の奥義をも極めて四國灸治院を創設その院長たり。天性義侠心に厚く人の難を見ては献身的にこれに封じて助くる美德は隠れもなく、その江ノ口に來住以來の近年に於ても町總代、其他各種の自治、公共團體に常に幹部として活躍したが數年來その灸術の名聲廣く四方に傳つて縣外各地より其出張施術を乞ふもの引きもきれず、一年の大半を殆んど九州、中國、四國及び近畿各地に過して

ゐるが偶々歸郷の場合は乞はれて神宮光彩殿等に數日を施術する際などの如きは一日二百名に達する施術希望者の踵を接するの大盛況を見る次第である。夫人直美氏亦灸術に巧み、父君と共に或は單獨にて各地に出張女流名灸師としての名が高い。

## 小澤國三郎氏

つい先達つて迄市内本町乗出しにホーム寫真館を經營しその獨得なる卓越の技能に大いに好評を博した主。埼玉縣南埼玉郡川通村の出身で明治二十五年生れ、細沼漢學塾に學び後慶應大學の經濟科を卒へたものだが、およそ縁遠い土佐くんたりへ殆んど永住のみこしを落ちつけた其因は遠く本縣政界の大巨頭たりし故町田且龍翁華やかなりし時代、東京に於てはしなくも小澤氏の人物を知りその人と爲りと殊に勝れたるその寫真技術に惚れ込んで辞を厚うし漸く迎へて縣地に移し、土陽新聞社の寫真部長を囑託した事に始まる。爾來氏の人物は故山本忠秀、中野寅次郎氏等にも深く愛されてその知遇を厚うするに到り、士は已を知る人の爲に死す、小澤氏も茲に一身の名利榮達の野心を棄て、時の同新聞社理事福留久米夫氏に勧めらるゝ儘、舊藩當時家老の名門であつた深尾家の愛嬢を迎へて室とし茲に永住の決心を据へて大いに爲さんとしたが、土陽新聞社が多年の政敵たる高知

新聞社の傘下に收められたるを潔よしとせず、驟然これと縁、本町から乗出しへ寫眞館を經營する傍ら佛教研究に凝つて大乘佛教の眞理把握と禪の究明を極め、佛大の教授高神覺昇師等に就いて倍々高遠の深奥を探つてゐる。去る六月一日から野村組經營の大坂朝日新聞販賣部を三万圓に買收して目下これの經營に熱烈な奮闘を續けてゐる。

## 泉谷彦治氏

不慮に逝いた小林民吉氏の後任として土佐商船株式會社に事實上の總帥たる常務取締役の椅子は果して何人を迎ふべきかに就ては獨り同社の關係者のみでなく縣事業界注目の的たりしは事實である。何しろ小林氏の八面玲瓏、玉の如き大人格と、まれに見る英才ぶりに多年培はれて來た土佐商船の今後を託すべきに斷じて常麟凡介の徒では許されぬ處へ、果然一白面の青年實業家泉谷彦治氏の登場は一瞬大向ふを呆然たらしめ次いで起る萬雷の拍手であつた。

得たりやな泉谷氏、見込んだりや野村氏。蓋し適材適所、流石は多年事業界に辛酸の有りつ丈けを嘗めた野村翁の眼は豪かつた。泉谷氏の人物を只の親の光りは七光り、野村氏の女婿なるが故には斷じて見てはならない。大正十四年大阪府立堺中學を出て高知高校に學び、京都帝大法學部を優

秀なる成績で卒業、爾來土佐商船大阪支店主任として縦横の手腕を揮ひ、將來の大物たるべく大いに内外から矚目されてゐた典型的事業家肌の人物で、人を見るに鋭敏なる野村氏のめがねに叶ふて愛嬢の婚室に選ばれたもの、果して野村氏の眼識に狂ひな、以來の土佐商船に幾多の難關を突破してゆく其の手腕のほどは日と共に更に一段の磨きを加へて倍々その將來を期待されるところ大なりである。

## 前田寛雄氏

氏は代々山内家の御表具師として連綿九代に渉る當主。先代順吉氏は英主容堂公に仕へて寵愛専らなりしと云ふ。當主は明治八年十月市内京町、今の一柳菓子店の所に生れ、明治二十二年頃より父の業を繼いで中島町、本町、帶屋町時代を経て昭和二年八百屋町の現在に到り、其間高知縣廳、高知營林局、各學校の御用を勤め、舊海南學校長の吉田數馬氏に愛されて同校の仕事は全部前田氏の手になつた時代がある。昔から名人肌の人に酒豪はつきもの、様であるが寛雄氏の好伴侶又一升徳利にあつて、その微薰を帯びた折など興に乗じてする仕事は亦格別と言はれる。氏は又稻波、後に稻波樓と號して俳句をよくし、花道にも名あり、或は年々主催して素人畫會を催す等、風流の氣横溢、令

息十代善三郎氏は明治四十年生れ、父祖勝りの技術と觀世の謡曲に知らる、登良惠夫人との間に三男あつて長男雄三君、二男潤次郎君は共に第二小學校に通學中、三男は未だ幼い。

前田家に傳はる年譜書を見れば、初代は三郎兵衛、一豊公入國後の人で明曆二年初めて表具師たり、二代孫市、三代太郎兵衛、四代多六を経て五代を石原順吉と呼ぶ、石原は師家の姓で其技神に入るところから、特に師家の名を許されたものらしい、六代目も亦順吉、七代から前田姓となつてゐるが、代々清廉で、藩主よりの褒狀にも特記されてあり、今の寛雄氏父子か、清廉の名高いもその血統の然らしむるところか。豊太閤の全盛時代慶長元年秋九月、南蠻船が漂着したと言ふので浦戸城下は大騒ぎ、それはマニラからノバエスベニヤの航海途中だつたイスパニヤの商船で、積荷の中一万五千反にも上る緞子の一片が現在市の舊家櫃家家に保存され、後世史家の垂涎するところだが、前田家には、代々山内家に仕へてゐた關係から緞子其他金銀欄の數片が保存されてゐる。尙前田氏の家號たる溫知堂とは所謂溫故知新の古句より引用、故福岡孝悌氏の命名によるものであると。

## 窪川清氏

香長平野の秋、一眸黄金の波、つ田圃道で筆者は昔、栗毛の駿足を靜かに打たせ乍ら悠然測歩す

る堂々たる體軀の紳士を見た。この溫厚の長者こそ長岡郡大篠村野田の大地主として幾多の小作人から慈父の如く慕はるゝ素封家窪川清氏の姿である。長郡の多額納稅者として巨萬の富を擁し乍ら、表に飾らす内に傲らず、人と交つて八面玲瓏、公共の心に厚く、慈悲心に富む、その大人格が燦然と輝く姿は、附近一帯夏の夜を彩る名物螢の、わけても鬼螢の名所野田にふさはしい大きい光である。世の常の富豪と異つて趣味に墮せず、淫せず、馬を愛して馬匹改良に功あり、ひいて競馬だけは何よりの娛しみである。當年四十一歳。

## 坂本和吉氏

佐古の龍河洞は天下的に其名を知られたが、同じ佐古村逆川出身の坂本氏も土木請負業坂本組の大親分として普く全國に名を轟はれてゐる。今こそ多少健康を害して或は大連市の令息の許に、時に故山に靜養して靜かに再起の日を望んでゐるが其事業は夫人の令弟小松福重氏が主幹となつて敏腕を揮ひ多年堅實な地盤に立つた勢力にビク搖ぎも見せない。

坂本氏は明治五年生れ、同三十三年今の明大の前身たる法律學校を卒へて東京冷氷株式會社へ支配人として入社したが、間もなく當時本邦土木請負業者中の巨頭たる白川友一氏が經營する白川洋

行に總支配人として聘せられ、傍ら運送業を主宰し滿鐵其他の大仕事を請負ふて敏腕縦横、白川組に坂本ありの名は漸次喧傳さるゝに到つたが、歐州戰亂當時陥落後の青島一番乗りを試みて將に大いに活躍せんとした折柄、例の大浦事件に白川組を代表して連座、事件は幸ひに無罪に終つたを機會に辭して阪本組を興し業績大いにある。即ち愛媛鐵道工事、高知鐵道の第一期線等を請負ふて鐵道側に知られ大正四年には鐵道省指定請負人となり栃木縣烏山線には空前の難工事を完成して名を擧げ、東京大震災に際しては、市内九ヶ所の橋梁架設、市外道路の建設等續々大工事に従事、土讚線の建設には其最も力瘤を入れたものだったが其頃から病を得て前述母ら閑地にあり、熱心な宗教研究に日を送つてゐる。性豪腹潤達で而も高潔な人格者として同業中でも好評噴々。

夫人は上葦生村の出。長男峻雄氏(三)は東京帝大理科出身で滿鐵に入り、現在北支事務局産業部の調査役として活躍、その夫人は神戸市選出の代議士原淳一郎氏の令妹で其間に二男二女がある。

## 小川 汜 滋 氏

山椒は小粒でもヒリリと辛い。吾南御疊瀬村は日本でも尻から第一番目と云ふ小村だが全村殆んど漁業を生業として一ヶ年の漁獲高六十萬圓、漁村としては全國有数の文化村である。茲の最近に過

ぎたるものが二つあり、一は縣下の町村長中の元老として、最有力者たる元縣會議員の武市義吉氏を迎へて村長の椅子に据へ、一は同村漁業組合の理事長に小川汜滋氏の如き人物を頂くの自慢である。小川氏は元一介の巡查から遂に高知縣警視に昇進、さきの高知警察署長として稀に見る高潔の大人格と嚴正公平、正義の前には何物をも怖れざる勇猛果斷なる快腕縦横、而も溢るゝばかりの人情味をたゞへた近來の名著長として未だに縣警察界の語り草に残る一偉材、幡多支廳長を最後に功成り名遂げて勇退後一時高知日々新聞の創刊當時同社長に迎へられ、その隨感隨想錄に獨歩の筆致を見せ、多藝多能真に行くところとして可ならざるはない俊英ぶりを更に裏書されたが、爾來幡多郡上灘村の夫人が郷里に落つて乾坤一擲に男の運命を賭ける大敷事業に従事中を、その人物をかはれて現在の椅子に迎へられ献身的努力を同組合の爲に捧げてゐるが、從來幾多の紛糾錯雜を見た組合が氏の就任以來見違へるばかり明朗化した事は、こゝにも氏の人格が遺憾なく輝やいて居り倍々將來のその大成が囑目されてゐる。

## 北岡 萬 次 氏

長岡郡後免町に於ける銘酒『あら玉』の醸造元として同町屈指の豪商、現に香長酒類販賣組合長、



長陵赤心會々長、後免信用組合長を経て理事、町會議員（四期）所得税調査員、後免青年團長と數々の肩書の下、ゆく所として可ならざるはない才人ぶりを見せてゐるが、大体同家は同郡三和村の出て先代萬次氏が一介の素丁稚から叩き上げて一代の成功を見た人であるだけ、今の萬次氏の教育薰陶にも嚴格を極め、巨萬の富ある家の子息としては凡そ不似合な程に仕込まれてきたものだが、これが市商出身後三十歳にして先代逝去の後を受け襲名してこの大屋台を切盛りする上についてどれだけ無形の力となつて現はれてゐるかも知れぬ程人と交つて如才なく奢らず傲らぬ圓滿の人格を作りあげてゐる。氏は又珍らしい敬神家で、また若年の頃から、町の郷社日吉神社境内の掃除を一日も欠がした事がないと云ふ佳話があり、靈場石槌山の先達を勤める等敬虔の生活を送つてゐるが、氏は子女の教育に當つても『健康と真面目』をモットーにし、暇あれば海に山に伴ふて令息令嬢等の体育に修養と教訓を怠らざる成果は、子女の悉く秀才の譽れ高く氏の教育法は立派に成功の實を結んでゐる。余暇には器水と號して芭蕉派の句をよくし同派縣下の重鎮としても名があるがこの夫君にしてこの賢婦あり介良村川村氏の女たる美代子夫人は縣立第一高女出の佳人で淑徳の聞へが高い。氏の令弟榮（三六）氏は慶大出身、北海道小樽市の商工會議所統計課長に、長男芳雄（三五）氏は名古屋高商を出て神戸造船所軍需資材倉庫部主任柔道五段の猛者で大日本學生相撲聯盟の理事、二男正道氏は小學在學中だが、長女操子（三三）さんは土佐高女卒、片地村の素封家原一氏令息孜郎氏に嫁し、二女總

子（三〇）さんも本年の土佐高女出身生花をよくして家事見習中、三女正子さんは土佐高女に、四女幸子さんは小學校に在學中。

## 幸川彌源治氏

安藝郡安藝町の名門で祖父源次氏は岩崎彌太郎氏の從弟に當り、同町の素封家須藤家に次ぐ富豪であつたが、源次氏が特別の理財家であつた爲充分な教育は施されず、これ程の家に生れ乍ら十五歳の時僅かに四十幾錢を懐中にして上阪、時の大阪商業學校の校長廣瀬宰平氏の玄關番に入つて同校を卒業、次いで大日本實業學會商學部を苦學にて卒へ、前後十四年間の大阪在住中廿九歳の折藥店を開業したが思はしからずして歸郷、安藝郡役所に奉職して次第に頭角を擡んで、町會議員等に推される等の傍ら並村總七、島崎竹吉氏等と謀つて並村製絲會社を創立、自ら監督として入社實業方面に活躍する一方安藝町消防後援會を縣下に魁けて組織しこの會長として縣より表彰を受くる等の事あり、又縣立安藝高等女學校の後援會に幹部として數々の功績ある等公共實業兩方面に盡瘁するところ多く現在同町の商工會長をも勤めてゐる。

一面風流の趣味に廣く六朝の書風、吐月庵凡山と號して芭蕉派の俳句をよくし、外に和歌の造詣

深く又松濤齋一仙の名は正風遠州流の生花に皆傳のお手並である。其他盆栽、喜多流の謡曲など氏の趣味は何れも對手の入らぬものばかりでこゝにも氏の風格が窺はれる。

家庭は安藝高女出身の長女の君が東京裁縫學校に學んで師範出身の現在安藝尋常小學校訓導岡林氏に嫁し、舎弟源十氏は大阪市に肥料商を開業、次弟茂助氏は帝大工科出身實業界に、令妹は農學博士で東京農大教授の島村寅猪氏が夫人となつて一門それづくに榮へ、幸川氏は今安藝の産業と史蹟、及び俳句大觀の著作發刊を計劃して執筆中、當年六十二歳。

## 島田房一氏

四國銀行の郡部支店中重要な地位にある幡多郡中村支店長として令名噴々の氏は長岡郡長岡村の出身で本年四十八歳、土佐貯蓄銀行より叩き上げて明治四十二年高知銀行に入り、各地支店を歴任して大正十二年遂に支店長と漕ぎつけ窪川町に赴任、十四年三月には清水へ昭和三年の一月宿毛の各支店長を経て本店に入り、同六年四月山田支店長に、七年再び本店に、十年六月中村に封ぜられて今日に到る。

濃厚圓滿の銀行人型で人情味あつくその長女が死亡後は嗜める酒を禁じて只管その冥福を祈る人

間味も床しい。餘暇には盆栽を娛しみ、骨董を愛し、又各地に製産される鐵瓶の蒐集家として知られてゐる。尙長男は目下應召出征中であり、氏は一倍謹嚴に身を持って愛息が武運長久を念じてゐる。

## 吉田元三郎氏

吉田元三郎氏は安藝郡西分村の人、銘酒響灘の醸造元として知られたる丸共醸造會社の現社長である。同社は明治三十九年、同君等に依つて僅に資本金千八百圓といふ小資本で丸共合名會社として誕生したもので、當時にあつては單に數名の者が交際費を捻出せんとする心積りであつたが、意外にも江湖の賞讃を博して歡迎さるゝに至つたので遂に本腰となり、逐次發展を見て現在では資本金十萬圓の堂々たる株式會社となり、醸造高一千石を降らす名聲日に日に熾なるの盛況振りである。往年小資本を以て僅々百二十石の醸造會社であつたのを顧ると實に隔世の感がある。斯くして同社の醸造酒は全國酒類品評會に於て優等賞、名譽賞を獲得し高知縣下に於ける代表的銘酒の一つとして重きをなすに至つたのは畢竟社長たる同氏の努力精勵と、指導宣しきを得たが爲めであると言はれ、その信望厚きものがあるが、同氏は嘗に同社の社長として敏腕を謳はれてゐるのみならず、全國酒造組合中央代議員、安藝郡酒造組合長、西分信用組合長の重職を兼ね且つ村會議員として最も

重きをなしてゐるのである。

同氏は資性重厚圓滿で果斷に富み、非常なる奮闘家であり、多忙なる營業にあり乍ら其の間園藝組合を起して速成栽培に力を注ぎ、同郡に於ける園藝の興隆を圖り、或は水産方面に助力して居村の繁榮策に盡す所があり、或は又信用組合の創立に奔走して金融の圓滑と産業の振興に貢獻する所あるなど其の功績甚大なるものがある。

同氏が社長として敏腕を揮ひつゝある丸共醸造株式會社の醸造に關しても常に研鑽を怠らず、今日の成功尙足らずとなし、多々益々造酒の品質向上を期して縣外に於ける醸造を視察研究し、或は醸造米の優良田地を検討し且つ優良酒造米の苗を移植して之れが使用を計り、一つには居村農家の福利に資せんとするなど献身的努力を惜まない風があるばかりでなく、今般酒造原料米として播州米の移植を試み二反歩の自作を行ふなど其の熱意は眞に驚嘆するものである。

同氏、一步家を踏み出せば、烈々たる奮闘斯の如きものがあるが、家庭にありては乃ち良きパパさんであり、一家頗る圓滿、美望に堪へざるものがある。長男武徳氏は高知市立商業、大分高商の首席卒業たるの俊才で現在は第百十銀行に勤務し目下應召中であり、次男泰行氏は本年市立高知商業を卒業、長女益喜さんは縣立安藝高女を卒業後、家庭にあつて生花、茶道を學び堪能の聞へがある。

## 西田良氏

長岡郡岡豊の地は、郷土の誇り英雄長會我部元親を生んだ所であり、岡豊城址は永久に日本史蹟の頁を飾つてゐる。西田良氏はその岡豊村吉田の産である。幼にして俊敏、神童と言はれた秀才で十一歳の時、教師に替はつて教壇に立ち、それが十三歳の時まで續いたといふ神童振りを見せたことは現在尙郷土の語り草として傳へられてゐる。同氏は常に志遠大にして瀟氣壓ゆべからざるものがあつたが、高等小學校卒業後家庭は氏を縣外に出すを好まず、上級校の志願を斷念させ二十歳迄大野漢學塾で漢學を學んだ。そして郡役所、村役場等に勤務し或は郡會議員に推され、郡參事會員となつて活躍し、或は村長となつて治績を擧ぐるなどの事があつた。併し是等の經歷は氏に取つては言ふ程の事でもない。

茲に同氏の爲めに特筆大書したいのは元親城址の岡豊山が同氏の所有である所より約八千圓の私費を投じて同山に西田公園を建設したことである。斯る公共的事業はいふ可くして行はれ難いものであるが、同氏が斷然之れを決行して公衆の爲めを圖つたことは大いに敬意を拂つてよいのである。西田公園の建設せらるゝや田中光顯翁は大いに之れを讚し自ら筆を執つて記念碑に揮毫し、昭和三

年之れが除幕式にはわさく老軀を運んで此の式典に参列されたのであつた。

氏は又第一徴兵保險會社の代理店として明治三十九年以來の歴史を持ち、かつて全國で第二位の成績を挙げ表彰されたこともある。尙同家は五代前の龜之進といふ人の時代より眼薬と腹薬の家傳で有名な家だけあつて長男利采氏は東京明治藥學校の卒業生で現在高知市本町三丁目で藥店を經營して居り、次男の利正氏も東京明治藥學校卒業後、市立城西病院の藥局長を勤め、三男利都氏は縣立師範二部を出て中村區裁判所に奉職してゐる。此の子寶を持つてゐる氏は、閑雲野鶴を樂しんで所謂樂隱居であるべきだが、國家的觀念の強い人として悠々自適せず、支那事變勃發後は夫人と共に銃後の活躍を續け、郷黨のために力を盡して敢て勞苦を惜しまざるの風があるのは其の主義、洵に敬仰すべきものがある。尙氏は歴史に興味を有し、土佐傳説會の副會長（會長野村茂久馬氏）として若者を凌ぐの元氣で活躍してゐることは偉とするに足るものである。

## 益井長次氏

今の四國銀行が未だ高知銀行の昔より、遠く明治三十八年以來三十有餘ケ年、一介の給仕を振り出しに十年一日の如く銀行事務に精進した氏の如きは、正に生へ拔きの銀行人であり、今日同行の

生字引として衆目敬仰的たる益井氏の如き人物は尊とい。即ち明治二十七年幡多郡中村町に生れ小學校を卒業したのみで當時の高知銀行中村支店に入つたはまだ白雲頭の十二歳であつた。爾來、仕事に飽くまで忠實だつた氏は次第に上司の信用を得累進して昭和三年一月には幡多郡上川口支店長に同年秋嶺北本山支店長と同行中堅の椅子を轉々七年五月には田野支店長、九年一月以來高岡郡久禮町の支店長として今日に及ぶ、堅實一方、石橋を叩いて渡る主義は銀行人として些のケレン味もなく未だ、將來の大成が期待されてゐる。

## 大久保千濤氏

吾川郡長濱町に鎮座する縣社善宮八幡宮の宮司として源賴朝の鎌倉時代より連綿こゝに七百歳、代々神に仕ふる名家の出、縣立第一中學校から早稻田大學文科を卒へた古い文學士で殊に史學の造詣深く『日本歴史の骨節』『東洋史のために』等のその著作は中央の史家をして舌を捲かしむる名著として有名である。市立高知商業に歴史の教諭たりし頃には、其該博なる智識と平易にしてユーモア味たつぷりの講義に全校生徒の人氣を一身にあつめたもの、後高坂高女にも招かれて教鞭をとつたが退職後は本業の高天ヶ原に専念、九州釜戸の國幣小社釜戸神社、河内の牧方神社の宮司とし

て赴任、歸縣後は若宮八幡に仕へて今日に到る。六十一歳の今、餘暇には未だ史學の研究を怠らず、特に郷土史の研究に精魂を盡し、さきに『吾南之名勝』を又土佐南學を講じた良書を上梓する等まれに見る篤學家であり、又長濱町の有力者として町發展、自治体向上に貢献するところも多い。一男は土佐商船會社の用度課に勤務してゐる。

## 小松隆與氏

多士濟々の四國銀行支店長級に一異彩として輝く小松隆與氏は現に高岡郡須崎町の支店長として重きを爲してゐるが、氏も亦多くの支店長諸氏と軌を同じうして多年實務に叩き上げた經驗家である。即ち明治二十一年香美郡西川村に生れて縣立第二中學校を中途退學し暫くは叔父の許にあつて別役郵便局の通信員を奉職したが、明治四十五年同郡美良布村の高知銀行支店に入つたのを皮切りとし本支店の各地に刻苦奮闘の銀行員生活を續け大正十年頃から漸く頭角を抜いて山田、安藝、田野赤岡、中村の各支店に歴任、昭和六年高知市江ノ口支店を経て同九年香川縣善通寺町の支店長に就任、次いで須崎支店長として現在に到り、もう押しも押されぬ第一流の銀行人、實務も手腕も沈練されて仕事にいささかのソツがない。長女は他に嫁し、長男は目下城商に修學中。

## 船谷國治氏

藝東室戸町に於ける四國銀行支店長として主に水産方面の金融を司る氏は當年五十歳、銀行家として漸く圓熟の域に達したる實務家として行内外に信望厚い。氏は松茸山で知られる香美郡片地村の出身、學歴は高等小學校のみしか無いが大正四年頃から同村々役場に入り、同八年同行山田支店に外勤として入社以來、漸次頭角を現して遂に昭和六年現在の職に到るまで長い銀行生活に、銀行家としての修練は、あます處なく休得して堅實一点張りの手腕を示してゐる。趣味は謠曲と魚釣り、室戸岬あたりの巖頭に、磯魚の大物を漁る手際は玄人の域にあると。長男と次男は高松高商と商船學校に在學、長女は醫師の家に嫁いでゐる。

## 辻大吉氏

高知市に於ける繁華街の中心地新京橋美人小路に『よあけ』の本支店、中店の三つを經營して行燈の灯も一ときは明るい食道樂の本家本尊辻大吉氏は今や日の出の勢である。

まづ氏が來歴の大要を述べれば、明治二十八年香川縣木田郡林村に代々村の郷士として知られた舊家に生れ、三歳の時父君の逝去に遭ふて以來苦艱に彩られる氏の人生行路は始まる。即ち十二歳の時上、阪食ひ倒れの大阪市でも特に美味しい物屋として名高い心齋橋の真ん中、名物『福壽司』の料理見習として入り、その快活にして生一本の性格は忽ち店主の信任を博して十七歳の頃には早くも銀行其他への重要な使ひは凡て氏の受持に限られてゐた程、やがて徴兵適齡で歸郷、丸龜の歩兵聯隊に入營中も一切の小使ひ等は『福壽し』から賄はれてゐたと言へば如何に氏の人物に對する主人の信頼と將來の期待が多かつたかが知れやう。除隊後再び『福壽し』に入つて調理主任として敏腕を揮ひ同家の名聲へ更に一段の光輝を添へると共に氏の名も漸く高まり、大阪すし商組合の十五周年記念の際には永年勤績及び優良店員として表彰され銀盃を授與された。

大正十年に至り主家を辭して同市浪速區木津市場に關東煮とその頃は未だなかつた一品料理の店を獨立開業したが時運に恵まれず間もなく閉店、更に東京の料理研究を志して上京、東京京橋畔に有名な蛇の目壽しに入り、三度大阪に戻つてからは堂島ホテル、戎橋の菊屋、心齋橋の鶴屋等何れも第一流の店に料理部主任として招かれ非凡の腕をふるひ高貴の方への御調理の任さへ幾度も蒙むつたが、其頃高知市中島町に盛業中のブラジル支店に於ける調理講習會へ講師として來縣、その人物と、卓越せる手腕にすつかり惚れこんだ當時高知市の割烹界の鬼才たる太田幾太郎氏に懇望され

て『赤玉食堂』『本おをた』の調理部長として居つたのが抑々江氏高知入りの由來である。

爾來四年間氏は東京大阪の料理と高知人の嗜好關係を深く研究して眞に土地の水にピッタリ適ふた調理の呼吸を會得『本おをた』の没落後即ち美人小路に關東煮と一品料理及び名物にぎり壽司の店を開き、その獨特の味と、竹を割つた様な主人公の性質などが次第に好評を博して店は次第に發展、ついで本縣嚙矢の河豚料理、東京式ちらしとます／＼評判を生んで開業五年目の今日では支店、中店を増設、高知市に於ける調理界の第一人者として更に盛名を馳せるに到つた。

氏は常に新料理の研究を怠らず材料の新鮮と、清潔第一を理想とし、眞の大衆的調理に忠實なる使徒たらんを念願とするところ、そこに斷然たる人氣と好評を博するも又宜なりと言ふべく、高知和洋料理屋組合の評議員、町幹事、消防組合班長、高知調理士組合の相談役、大阪北友會の相談役兼幹事長等に推され、その人物もいよく大成しつゝあり、市内金子橋藤田嘉吉氏の長女を夫人に迎へて一家は益々繁榮への一路を辿つてゐる。

## 川村益太郎氏

川村益太郎氏の名を聞けば、往年縣會議員として縣下の政界に華やかな活躍をしたあの颯爽たる

武者振りを想ひ起すであらう。明治の末期から大正の初めごろへかけて氏の活躍は目覺しいものがあり、又それだけ聲名もあつた。當時氏は東都屈指の富豪で醸造業と鑛山業を営み隆々たる勢力があつた。従つて其の活躍振りも豪華なものであり金満家の通有性ともいふ可きケチ／＼した所がなく頗る太つ腹であつた。事業の失敗後は、郷里香美郡夜須村に落ち付いて中澤伊勢吉君の村長時代に入つて助役となり、現在村長として村風子で村まつてゐるが、談すれば時に往年の覇氣の閃きがあり、其の全盛時代を想はしめる。

夜須村は景勝の地手結港を有する事に於て知られてゐるが、手結港をして今日の手結港たらしめたものは全く川村氏の力であり、同氏の頌徳碑が手結港に建設されてゐる程である。此の功績を始め其他郷土のために盡したる功勞は多く村民は村の恩人として慈父の如くに敬慕し、村長就任を懇願したのである。誰一人として川村氏に反對の聲を擧ぐる者はなく、此の名村長を補佐してゐるのである。徳望も此所に至つて極まれり、と言つても取て過言でないであらう。

## 伊丹卯之八氏

千代田生命保險會社は、現日本の五大保險會社の一つであつて錚々たる名を馳せてゐる保險會社

である。現在會社の總契約高は十八億三千萬圓といふ驚く可きものあり、全國に亘つて支部、出張所の數が七十餘箇所、社員三千三百餘名といふ大會社だ。

高知出張所は市堺町にあつて所長は伊丹卯之八氏、本年五十歳の圓熟したる手腕家である。氏は香川縣小豆郡大鐸村の出身で、今より二十年前同社の大阪支部入社を振り出しに、神戸、香川の支部を歴任して高知出張所長となつた人で、堂々たる身軀の持主であり、同時に雄辯と熱の人である。香川縣支部長時代に、各保險會社の支部長及び社員を前に廻はし大阪鐵道局の香川縣従業員を殆ど全部總契約したといふ熱と腕とを有して居り、他の會社の支部長と立會演説なら何時でも辭せずてふ雄辯の自信を持つてゐて意氣激刺たるものがある。されば、此の意氣、此の熱が同氏を成功せしむるものであつて、香川縣に在任中は殆ど理想通りの成功をしたと言はれてゐる。

かういふ人物であるので、高知着任早々より早くも活動を開始し、自ら第一線に立つて百万圓契約を目標に邁進してゐるといふ有様である。其のため高知出張所は俄に活氣を呈して全社員はいやが上にもハリキリ、此の所長にして此社員ありの勢を以て伸展しつゝあるのである。同氏は頭腦明晰でよく社員を統一し、又頗る親しむべきものがある。夫人との仲に二男があり、長男は大阪の西原商店に勤務してゐるが、氏は子供の成功を楽しみつゝ、別に趣味にも耽溺せず、唯だ仕事を趣味とし之れに興味を持つてゐるといふ活動家である。

## 片桐仲二氏

縣内外の財界、實業界に活躍して重要な地位を占め、或は中堅幹部として華々しい名を轟はれつゝある人物の殆どその大部分は市立高知商業出身と云ふ程に輝やかしい母校の名を高めてゐるが、その同校出身者中でも若くして今日の大成功をおさめたる第一人者とし、宛かも相撲道に於ける新大關前山山の俤を示す潑刺たる新人をわが片桐仲二氏とする。

氏は年齒いまだ四十一歳、高知市京町に本市最古の書籍店として有名なる片桐開成社主片桐仲雄氏の實弟、大正五年に市立商業を優等にて卒業後、當時飛ぶ鳥おとす勢にあつた神戸鈴木商店の東京支店に入店、早くも儕輩を抜いてその前途を囑望されたが、同店の没落に遭ふて退社、其頃僅かに資本金三十萬圓の中山悦二商店に入り忽ちその卓越せる才幹を店主より認められて一躍支配人に拔擢さるゝや同氏の手腕は倍々發揮され、業績次第に上つて遂に現在の資本金三千萬圓、全額拂込の株式會社大中山製鋼所とまで發展膨脹するに到り、氏の地位もこれと相比例して高まり即ち現在同社の樞軸を司る常務取締役の榮冠はこの若き實業家を飾るに到つたのである。又最近は大阪市より木津川飛行場を買収し資本金を四千萬圓に増資する等、氏の行くところ八方可ならざるはない有

様に、片桐の中山か、中山の片桐かと評される程大阪第一流の青年實業家として經濟界に重きをなしてゐるが更に氏が活躍の現況を見るに右の外△關西商事株式會社(資本金三百萬圓拂込) 監査役△日本耐火工業株式會社(資本金二百萬圓拂込) 取締役△中山證券株式會社(資本金二百萬圓拂込) 取締役△中山商事株式會社(資本金三百萬圓拂込) 取締役△奉天中山工業廠(資本金百萬圓拂込) 取締役△上海中山工業廠(資本金百萬圓拂込) 取締役等々を兼ねて、今後の大成は大いに期待さるべく前述市商出身者中出世頭のナムバーワンを以てするも敢て過言にあらざる次第である。

氏は西宮市大井手町に昨年宏壯なる邸宅を新築し、淑徳の聞へ高いよし子夫人との間一男一女あり、長男利彦君は伊丹中學四年、長女は治子さんといふ。片桐氏の趣味は神社佛閣の參拜とハイキングである。

## 井上可澄氏

長岡郡稻生村は、全國に冠たる石灰山を有するに依り工業村として知られ、自然村民の工業觀念といふものが厚く、事業熱も亦旺盛な所である。井上可澄君は、此の工業村の村長として嘖々の名がある。



氏は明治二十六年生れ、長岡郡介良村外五ヶ村の村立實業補習學校を卒業後朝倉聯隊に入營し、充分なる心身鍛練を得て退營、歸村後は同村在郷軍人分會長に推されて活躍する外農會副會長、耕地整理員、土木委員、産米検査委員、産業組合長等に擧げられ旺んに同村の發展に努むる所があつたが、その信望は遂に本年推されて村長の就任となつた。

氏は農家の出身であるだけに、農村の振興策に就ては可成り深く研究する所があり、工業村としての同村に對しても亦一種の理想をもつて將來の發展策に考慮を費してゐる、資性頗る恬淡で果斷に富み、一度び信すれば勇往邁進して聊かも遲疑せず、頗る鮮かなる手腕を見せるので村民の信賴が厚い。

## 吉田登馬氏

高知市役所の大金庫を預る會計課長として次の收入役を約束されてゐる吉田氏は、森本庶務、濱田秘書の兩課長と共に廳内三羽鳥の手腕を謳はれる人物である。その明晰にして緻密なる頭腦と計數に明るい才腕、とくに複雑なる部内の事務を處理して剩すところなく部下の人望も特に厚い。

高知市久万の人で明治三十年生れ、中村區裁判所の雇から高知區裁判所雇に轉じた頃、召集され

て歩兵第四十四聯隊に入隊、遠くシベリヤに出征して朝北の曠野に奮闘したが晴れの除隊後大正十五年五月大阪市役所に奉職、同十二年三月には招かれて故郷下知町役場に書記たりし事あり大正十五年一月市書記に昭和二年五月稅務係、次いで市稅係から昭和十二年主事に任ぜられ會計課長となつた拔擢組、未だ／＼その前途が大いに囑望されてゐる。

## 高橋幸吉氏

高知日日新聞の總務兼編輯長高橋幸吉氏は濫厚を以つて知られてゐる新聞人だ。吾川郡上八川村の出身で、縣立農業學校を卒業後關西大學に學び、大阪稅關に勤務中其の文才と人格を認められて高知新聞社に入社した。そして同社の編輯局にあること十九ヶ年、中島成功氏が編輯監督となるやその後をうけて編輯局の主任となり、老練の腕を揮つて編輯に當つてゐたが十三年二月迎へられて高知日日の總務兼編輯長となつた、高知日日が氏を迎へたのは大いに飛躍を試みるが爲である。凡そ新聞社の編輯長なるものは、單に編輯局の統一を計り、原稿の添削することのみで、足れりとするものではない。常に頭腦をあらゆる方面に働かせ、微細なる事柄に對しても之れが検討、注意を怠らず、神經を過敏に働かしてゐなければならぬ、他の製作品とは異り新聞は日日それが紙上です

べてを物語るものである以上、日日朝夕の紙面は、編輯長の手腕い如何を物語つてゐるものであり、緊張と弛緩が直ちに看取される。高橋氏が入社以來、高知日日新聞の紙面は活氣を呈し、一般の好評を受けて讀者を吸集しつゝあることは乃ち、編輯長たる高橋君の手腕を如實に物語るものであつて高日の前途に多大の希望がある所である。

## 桑名董延氏

縣教育界の主事坂本氏が川島正件氏の後を襲ふて城東商業の校長に就任する事となつた時、教育界の眼は、坂本氏の後任者が何人であるかに注意深く注がれてゐたのであつた。坂本氏が手腕、信望があつただけに、後任者は又それだけの人物を要したこと勿論である。遂に安藝第一小學校長の桑名董延氏が選ばれてその後任となつたことは教育界をうなづかしめるものがあつた。

氏は明治四十二年の縣立師範出で、城山高等小學校長、吉川、山北、長濱と校長を歴任し、安藝第一小學校長に在任中であつた教育界の重鎮であり、到る處校長の名を博した好人物である。安藝郡時代に入つてからは、同郡の教育會長、子女團長、其他幾多の要職にあつて信望があり、郡内生徒の体育向上に力を注いだり、幼稚園の設立を圖つたり、熱心なる教育家として全縣下よりも認

## 濱田稔氏

められてゐた。斯様に熱心であり、苟も教育に關する事に於ては身命を賭して活躍奔走するので自然に藝郡教育界のリーダーとなりその指導啓發する所も亦多かつたのである。同君が今回拔擢されて縣教育會の主事となつたことは正に適材適所で教育界より歓迎されてゐるのである。

高知市役所の秘書主任として事實上川淵市長の女房役としその懐刀である。同じ懐刀と言つても作らへばかりが見事であり、中味は案外の鈍刀もあるが、濱田氏の場合はよく一閃肉を削ぎ骨を刺す剃刀の鋭さである。川淵氏が近來の名市長として好評噴々の蔭には所謂椽の下力持ちに甘んずる濱田氏の功績を見逃してはならない。明治二十一年六月長岡郡國分村比江に生れて同四十一年の縣師範學校卒業生、爾來長岡郡大杉村小學校を初陣に、長幡兩郡の各校に歴任し長岡高等、香美郡赤岡小學校の校長を経て昭和四年には市第三尋常小學校に校長として名あり、七年二月高等官八等を以て待遇される。同年秋市書記として秘書課へ、その閥歴と方能は長く下積みとして許さず、同十二年末課長と同じ地位にある秘書主任兼人事係に拔擢されて腕を揮つてをり更に將來が期待されてゐる。趣味は釣魚、今年も亦長竿を肩に鏡川あたりの上流を彷徨ふ氏の姿はよく見受けら

れるところである。

# 森本健氏

氏は川淵市長の下、明朗なる高知市役所にありて庶務課長の要職を占む。明治二十四年八月を以て土佐郡朝倉村に生れ高知一中を卒業後一年志願兵として歩兵第四十四聯隊に入隊、昇進して軍曹となる。大正三年居村役場の書記を振り出しに翌年には土佐郡書記に、大正十三年高知縣廳地方課屬を拜命し爾來恪勤精勵、昭和七年三月には地方事務官として高等官八等に叙せらる。

同年退職して直ちに高知市役所に入り庶務課勤務、ついで十一年には會計課長を翌十二年十二月庶務課長に任せられ今日に到りし人。長崎前庶務課長は市廳きつての生字引と言はれ令名の高かつた人だけに其後任者の手腕には相當注目されるところ多かつたが、多年官廳事務に精通せる森本氏の殊に自治制に明るい才腕はよく前任者を凌いで適材適所の評あり、性温厚篤實廳内の人望も芳ばしい。

×

×

×

# 附記

(本書編輯中轉任又は退職、逝去されたる諸氏左の如し)

## 轉任及退職者

- 長崎健夫氏 (元四國銀行主事)退職  
西山徳治氏 (前野村組自動車株式會社營業部長) 現高知日々新聞社總務理事  
北村秀實氏 (元四國銀行上街支店長) 現在高知瓦斯株式會社支配人  
高木契蘭氏 (元野村自動車株式會社專務取締役)辭職東京在住  
野村清太郎氏 (前高知日々新聞社營業部長) 現大阪朝日新聞社高知販賣部會計課長  
松本治一氏 (不動銀行高知支店長)現北海道札幌市三和銀行支店在勤  
池内實吉氏 (元高知市役所教育課長)現高知縣教育會會長  
長崎伊之助氏 (元高知市役所庶務課長) 長岡郡介良村長  
泉芳輔氏 (前三和銀行高知支店長) 現大阪市三和銀行南支店  
門脇卓朗氏 (前四國銀行北町支店長) 現四國銀行上街支店  
岡林信衛氏 (元四國銀行用度課長) 現高知病院事務長  
坂本重壽氏 (前高知縣教育會主事) 現城東商業學校々長  
岡村長藏氏 (前魚長旅館主) 廢業轉居

淺井茂猪氏 衆議院議員當選

- 川島正件氏 (城東商業學校々長)退職  
入交太藏氏 (前高知商業會議所副會頭) 現高知商業會議所會頭  
門矢卯太郎氏 (四國銀行江ノ口支店長) 現高知縣鐵工組合聯合會會計課長  
原重壽氏 (四國銀行須崎支店長) 現愛媛縣宇和島四國銀行支店長  
赤瀬清氏 (前千代田生命保險株式會社高知出張所長) 現高松千代田生命株式會社出張所長  
川村嘉市氏 (株式會社丸乃百貨店社長)  
山脇國馬太氏 (前高知縣電氣局長) 退職  
田野岡元吉氏 土佐電氣株式會社發電課長、土佐バス株式會社專務取締役  
武市源三郎氏 (前四國銀行考查課長兼企劃主任) 同行用度課長  
芝藤濱市氏 高知縣度量衡器計量器商業組合理事就任  
勝田一雄氏 (前大阪朝日新聞社高知通信部主任) 和歌山市同社支局長に轉任

## 逝去者

山本 忠秀氏 (元貴族院議員)

- 小林 民吉氏 (前土佐商船常務取締役)
- 大脇 幾司氏 (前野村組常務監査役)
- 西本 直太郎氏 (前高知新聞社々長 高知辯士會長)
- 吉岡 勘平氏 (前商工會議所議員)
- 武藤 龜次氏 (實業家)
- 山本 源三郎氏 (四國銀行常務取締役)
- 岡峯 磯之助氏 (先代玉の尾樓主)
- 川口 虎衛氏 (野村組自動車會社囑託)
- 宮田 繁樹氏 (元立憲政友會高知支部長老)
- 猪野 馬太郎氏 (元民政黨高知街重鎮)
- 岡林 楠吉氏 (實業家)
- 岡 兵馬氏 (計理士)
- 野島 博愛氏 (前香美郡美良布村長)
- 永國 龜齡氏 (桂濱水族館經營水產業者)

昭和十三年六月十八日印刷  
 昭和十三年六月二十八日發行

定價五圓

高知市追手筋五十八番地  
 編輯兼發行者 宮田 晴 治  
 高知市天神町二百十四番地  
 印刷者 岩原 駒 尾  
 高知市天神町二百十四番地  
 印刷所 岩原 印刷所  
 高知市追手筋五十八番地  
 發行所 高知尚文社

高知市本町

土佐電氣株式會社

電話代表二、二六〇番

顧問 安田善次郎  
頭取 安田善五郎



株式會社 四國銀行

高知市南播磨屋町  
代表電話二、三四〇番

高知市堺町六番地

土佐バス株式會社

電話 一、〇七〇番  
三、九四番

高知市堺町

株式會社

# 野村組

電話二五八〇番

高知市新京橋

大西時計店東店

電話五三一番

高知市新京橋

大西時計店西店

電話二三九番



# 經 營 航 路

大 阪 神 戶 高 知 線

(神戶驛經由省線連絡)

(高知驛經由省線連絡)

高知、西沿岸經由宿毛線

高知、土佐阿波沿岸經由阪神線

## 土 佐 商 船 株 式 會 社

高知市棧橋通五丁目 電話代表二二四〇番



高知縣後免町

高知鐵道株式會社

電話(後免)二〇番

高知市丸池町三十九番地

高知瓦斯株式會社

電話 二〇一  
二〇二番

高知市新京橋

カフェー 松原食堂

電話 一二六五番

土佐特産 古代塗

古代塗の特色

鑄物性の朱と純日本産漆を以つて固め極地堅牢にして塗巧  
の入念なる作風の高雅なる技巧並に滋味に於て卓越せるは  
我が土佐古代塗の持つ生命であります。  
詳細型録は申込次第御進呈致します。

營業種目

各種盆類、硯函、葉  
器、入、燭書、入、菓子  
生花、基、石、入、花、瓶、和  
洋室、煙草、火鉢、會席  
セツト

土佐古代漆器株式會社

本店 高知市木履屋町通り  
工場 潮江梅ヶ辻局前  
電話 一、五、四、七、番

完設 館旅粧明 名土  
成備 所佐



丁二町島中市知高

ルテ末佐土

番三五二・三一二話電

店貨百の知高



會株  
社式

丸

乃

舊 野村デパート  
改 稱

代表取締役 川村 嘉市  
取締役兼支配人 宇田 喜太郎

番〇四九一表代話電 町堺

銘酒

菊若葉

醸造元

安岡 醸

高知市田淵町  
電話 七五四番



特色ある日本刃物  
刃物は土佐の特産  
土佐刃物は当社製品

(山林伐採、運材器具、農具、土工具)

吳海軍工廠  
陸軍兵器廠  
指定工場

高知縣香美郡大楠植村

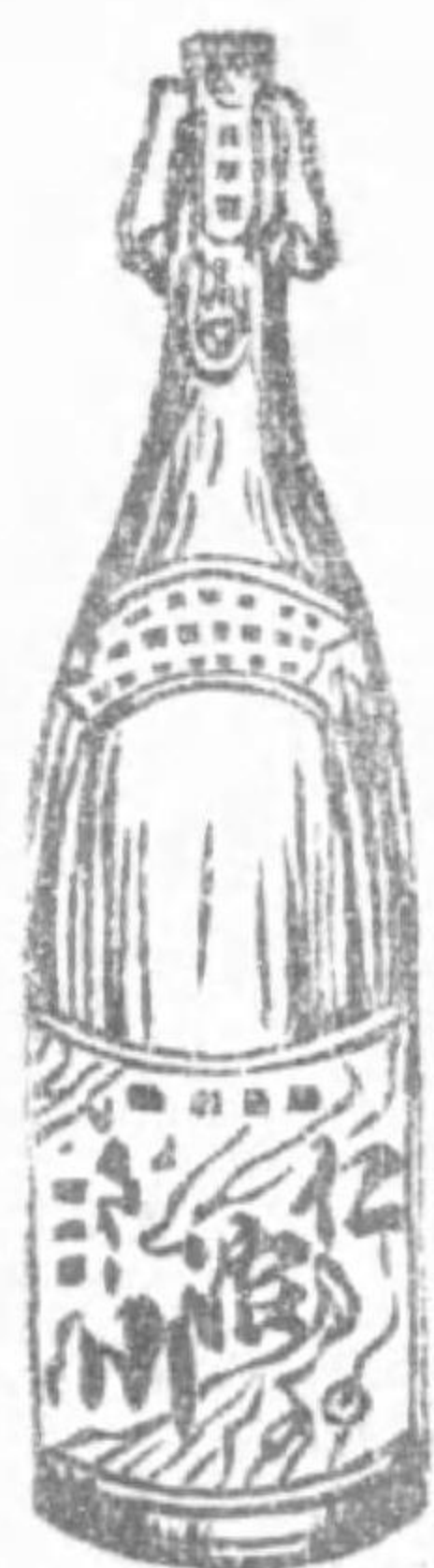


土佐金物合名會社

電話片地(一) 三番  
電信略号(ト) サ  
振替口座大阪(七二二七七)

於全國品評會優等賞受領

銘酒



ワガドヨニ

釀造元 片岡武雄

高知市本町筋三丁目

電話二九七番

土佐三景

桂	龍河洞	室戸岬
濱	大自	日本八景
の史跡	然の	黒潮の絶景
	驚異鐘乳洞	

野村自動車株式會社

電話二八一番

高級貸切自動車部

電話六三八番

遊覽バス野村自動車

電話二四〇〇番

醬油



大高

釀造元

大高釀造株式會社

高知市潮江上町

電話 一一二七番



諸官廳各眼科病院御用達  
度量衡器 計量器販賣所

天狗堂眼鏡店

店主 芝藤 濱市  
本店 高知市本町四丁目  
電話九五九番  
支店 全市堺町  
電話五六八番

高知市新京橋

丸新百貨店

電話貳參五九番

メカネ  
高知ナラ  
伊予眼鏡店  
ハイマヤ町  
一丁目西側  
電話1980番



精釀吟所特



町田山佐土  
釀吟場造酒澤有

終

